



Better Health, Brighter Future



Annual Report 2016
Creating value for patients around the world

武田薬品工業株式会社

Who We Are

タケダについて

235年の歴史を持つタケダは、常に**患者さんを中心**に考え、イノベーション創出に立脚したグローバル製薬企業として、世界中の人々により健やかで輝かしい未来をお届けすることを目指しています。



Mission 優れた医薬品の創出を通じて人々の健康と医療の未来に貢献する

Values タケダイズム、それはタケダが創業時から大切に守ってきた価値観のうえに培った、経営の基本精神。この揺るぎない基本精神が、タケダで働く一人ひとりの**ビジョン2025**実現に向けた取り組みを支えています。

私たちの経営の基本精神である「タケダイズム」は、いかなる場面においても誠実を旨として事業を営むという私たちの揺るぎない価値観であり、あらゆる業務において最も優先されるものです。タケダイズムに則り、私たちは高い倫理感を持ち、公正かつ正直に業務を遂行し、不屈の精神でビジョンの実現に取り組んでいます。



私たちは、4つの重要事項について、その優先順位に従って考え、行動や判断の基準とします。

- 1 常に患者さんを中心に考えます
- 2 社会との信頼関係を築きます
- 3 レピュテーションを向上させます
- 4 事業を發展させます

表紙の写真について:
ドンクレイトンさん — 2008年に多発性骨髄腫と診断された患者さん。家具メーカーの副社長を定年退職。サッカーファンであり、マンチェスター・ユナイテッドの熱心なサポーター。

Vision 2025

ビジョン2025

タケダは、世界中のあらゆる人々のニーズに貢献しています。タケダイズムを通じ、社会やタケダの医薬品を必要とする方々からの信頼を得ています。機動性とイノベーション、さらに高い品質に支えられ、強固なパイプラインのもと成長し続けるベスト・イン・クラスの製薬企業として認められています。

Our Strategic Roadmap

戦略ロードマップ

ビジョンを実現するためのステップは、タケダの戦略の中に示されています。タケダは、「**Values** (バリュー)」「**People** (世界中の人々・仲間)」「**R&D** (研究開発への挑戦)」「**Business Performance** (事業の持続的成長)」にフォーカスし、ビジョン2025の実現に取り組みます。

編集方針

タケダの「**アニュアルレポート2016**」は、「経営の基本精神」に基づくタケダの事業戦略と成果について、世界中の患者さんに対して、どのような価値を創造し、提供することができるか、という視点からご説明することを目指しています。

統合思考

タケダは、1781年の創業以来培ってきた普遍的価値観タケダイズム(誠実・公正・正直・不屈)に基づいて、「優れた医薬品の創出」に取り組んでいます。また、このような事業活動そのものが、企業の社会的責任(CSR)の根幹であると認識しています。

統合報告 / CSRデータブック

当社は、より詳細なCSR活動に関する情報について「**CSRデータブック**」に掲載し、幅広いステークホルダーのニーズに対応する統合的な報告に取り組んでいます。

「**CSRデータブック**」を、ホームページに掲載しています。
<http://www.takeda.co.jp/csr/reports/>

見直しに関する注意事項

このアニュアルレポートは、タケダの計画、見直し、戦略、業績などに関する将来の見直しを含んでいます。この見直しは、現在入手可能な情報から得られた判断に基づいています。

したがって、実際の業績は、さまざまなリスクや不確実性の影響を受けるものであり、これらの見直しとは大きく異なる結果となることをご承知おきください。将来の見直しに影響を与える要素には、タケダの事業領域をとりまく経済環境、競争圧力、関連する法規、製品の開発状況の変化、為替レートの変動などがあります。ただし、見直しに影響を与える要素はこれらに限定されるものではありません。

製品情報に関する注意事項

このアニュアルレポートには、武田薬品の製品についての情報が含まれていますが、それらの製品は、すべての国で発売されているものではなく、また国によって異なる商標、効能、用量などで販売されている場合もあります。また、アニュアルレポートに記載されている医薬品(開発品を含む)の情報は、そのような製品を宣伝・広告するものではありません。アニュアルレポートに記載されている製品に関する情報は、医学的アドバイスの提供を目的とするものではなく、決して、医師その他医療従事者によるアドバイスの代わりになるものではありません。

「アリナミン/Alinamin」、「アジルバ/Azilva」、「エンティビオ/Entyvio」、「ロトリガ/Lotriga」、「ルプロン/Lupron」、「メバクト/Mepact」、「ニンラーロ/Ninlaro」、「タケキャブ/Takecab」および「ベルケイド/Velcade」は、武田薬品工業株式会社またはその子会社の日本およびその他の国における商標または商標登録です。「アドセトリス/Adcetris」は、Seattle Genetics, Inc.の米国およびカナダにおける登録商標です。「トリンテリックス/Trintellix」は、H. Lundbeck A/Sのデンマークおよびその他の国における商標または商標登録です。「ベクティビックス/Vectibix」は、Immunex Corporationの米国およびその他の国における商標または登録商標です。

(注)このアニュアルレポートの内容は、グループ連結対象会社の2015年度(2015年4月1日~2016年3月31日)の実績に基づいています。(一部、2016年度の活動内容も含みます。)市場環境、市場シェアなどについての記載は、IMSデータ「Long Term Country and Therapy Area Forecasts」およびBMIデータを踏まえた当社分析に基づいています。

Our History タケダの歴史

優れた医薬品の創出を通じて患者さんのニーズに貢献する

普遍の価値観

1781年に初代近江屋長兵衛が日本の薬種取引の地として知られていた大阪・道修町で和漢薬の商いを始めて以降、誠実さや高品質の薬・サービスの提供で評判を得てきました。誠実さはやがてタケダの普遍的な経営の基本方針の核として深く根付き、今日に継承されています。



1781年: 創業

初代近江屋長兵衛が大阪・道修町で薬種仲買商を始め、高品質の薬を提供

1895年

自社工場で製薬事業を開始

1933年

「京都薬用植物園」を開設し、世界各地の薬用・有用植物を収集・活用

1871年

洋薬(西洋医薬品)の輸入を開始

1914年

研究活動を開始

1940年

タケダイズムの礎となる「規」を制定

1950年

日本初の総合ビタミン剤「パンビタン」を発売

1954年

ビタミンB1誘導体「アリナミン」を発売

1960年

優秀な学生を支援し将来の社会に貢献できるよう、育英事業を目的とする「尚志社」を設立

1962年

海外市場に進出

1963年

有望な研究および科学技術の助成振興のため「武田科学振興財団」を設立

1980~90年代

4つの国際戦略製品(「リュープロレリン」、「ランソプラゾール」、「カンデサルタン」、「ピオグリタゾン」)によりグローバル事業拡大が加速

くすりの町、道修町

創始者の武田長兵衛は、薬商の中心地だった大阪・道修町の薬種仲買商・近江屋に奉公した後に近江屋喜助家からのれん分けを許され、薬種仲買商として別家、独立創業しました。当時の道修町には薬種仲買商の他、問屋、小売り、仲買人といった薬種商が軒を揃えていました。道修町は、現在でも製薬会社が立ち並び「くすりの町」として知られています。

京都薬用植物園における生物多様性保全への取り組み

京都薬用植物園は、80年以上にわたって、世界各地から薬用・有用植物を収集・活用してきました。現在、約2,800種の植物を保有しており、うち2,435種が薬用植物です。絶滅危惧種は、準絶滅危惧種を含む174種を保有しており、200種の保全を目指して収集を続けています。

「規(のり)」

五代目長兵衛が制定した社は「規」は、初代長兵衛の時代から受け継がれてきた商業倫理、人道主義を引き継ぎ、近代社会の製薬企業の発展に求められる経営理念として明文化したものです。

1. 公に向かい国に奉ずるを第一義とすること
2. 相和き力を合わせ、共に逆らわざること
3. 深く研鑽に努め、その業に倦まざること
4. 質実を尊び、虚飾を慎むこと
5. 礼節を守り謙虚を持すること

日本の老舗から世界のタケダへ

日本国内で製薬トップブランドとしての地位を堅固にしたタケダは、海外への事業拡大、創薬研究により一層力を入れました。1980~90年代に発売された4つの製品、前立腺がん・乳がん治療剤「リュープロレリン」、消化性潰瘍治療剤「ランソプラゾール」、高血圧症治療剤「カンデサルタン」、2型糖尿病治療剤「ピオグリタゾン」は、世界中の多くの患者さんに届けられました。この4つのグローバル製品により、タケダは海外市場の基盤を確立していきました。



2008年
 バイオ医薬品会社のミレニアム社を買収し、
 がん領域を強化

2010年
 アフリカの保健医療人材の育成を支援する
 「タケダイニシアティブ」を開始

2014年
 潰瘍性大腸炎・クローン病治療剤
 「エンティビオ」を欧州・米国で発売

2015年
 CiRA*との共同研究プログラムT-CiRAを開始し、
 iPS細胞技術の臨床応用を目指す

2016年
 研究開発の重点疾患領域を絞り込み、
 最先端のイノベーション創出を目指す

2016年
 タケダの目指す姿「ビジョン2025」
 を制定

2009年
 「国連グローバルコンパクト」に
 参加し、2011年には
 「LEADプログラム」へ参加

2011年
 新興国に強い販路を持つナイコメッド社を統合し、
 事業基盤が70カ国以上に拡大

2015年
 多発性骨髄腫治療剤「ニンラーロ」
 を米国で発売

2016年
 日本においてテバ社との合併会社
 の特許期間を満了した医薬品を承継し、
 革新的な新薬に集中する

世界のがん撲滅に向けて

オンコロジー（がん）領域において卓越した知識・技術・経験を有するミレニアム社の統合は、アンメットメディカルニーズの大きいがん領域での貢献を目指すタケダにとって大きな推進力となりました。ミレニアム社は、オンコロジー（がん）領域だけでなく炎症性疾患領域においても有望なパイプラインを有しており、潰瘍性大腸炎・クローン病治療剤「エンティビオ」や多発性骨髄腫治療剤「ニンラーロ」はミレニアム社が創製したものです。

多様な価値観と相通じる企業文化の融合

ナイコメッド社の統合により、日本と米国に過度に依存していたタケダの地域別売上ポートフォリオは、日本、米国、欧州、新興国のバランスがとれ、安定的な事業展開が可能となりました。また、4つの地域における従業員比率もほぼ均等になり、ダイバーシティの推進が実現されました。一方で、ナイコメッド社の従業員に根づいている、チャレンジ精神あふれる“Can do”の企業文化は、誠実・公正・正直・不屈のタケダイズムに通じています。多様な価値観と両社の企業文化の融合により、タケダは一層のグローバル化を進めることになりました。

長期収載品（特許期間を満了した医薬品）に依存したビジネスモデルからの脱却

日本におけるジェネリック医薬品に対する患者さんのニーズおよび医療費抑制といった社会的要請の高まりに対応するため、タケダは、事業モデルの転換に機動的に取り組んでいます。特許期間満了後の医薬品が急速にジェネリック医薬品に置き換わる市場環境の中、テバ社のジェネリック医薬品とタケダの特許期間を満了した医薬品を扱う合併会社を設立しました。合併会社を通じて高品質な医薬品を適切な価格で提供する一方で、タケダはより一層革新的新薬の創出やデータ構築、情報提供・収集に力を注いでいます。タケダは、常に変化する患者さんのニーズや市場環境を的確にとらえ、ユニークなソリューションを提供するとともに、医療のイノベーションをリードする取り組みを一層強化します。

*2010年に国立大学法人京都大学内に設立された、世界初のiPS細胞に特化した研究機関。

Vision2025:タケダのありたい姿

タケダは、世界中のあらゆる人々のニーズに貢献しています。タケダイズムを通じ、社会やタケダの医薬品を必要とする方々からの信頼を得ています。機動性とイノベーション、さらに高い品質に支えられ、強固なパイプラインのもと成長し続けるベスト・イン・クラスの製薬企業として認められています。

「タケダはこれからも、
世界中の患者さんのニーズに貢献する、
機動的でイノベティブな
創薬のグローバルリーダーを目指します。」



Message from **Christophe Weber**, President & CEO

クリストフ・ウェバー社長CEOメッセージ

「患者さんのために、これまで以上に何ができるか？」

タケダでは、全てがこの問いかけから始まります。

タケダの創業者である初代近江屋長兵衛は、病に苦しむ患者さんに何ができるか昼夜問わずに考え、事業を誠実に営むことを信念としていました。患者さんを中心に考えるという創業者の精神は、タケダの経営の原点として世代を超えて脈々と受け継がれ、創業235年を迎えた今日も、世界70カ国以上のタケダグループ全体の基本精神として根付いています。

タケダの長い歴史は、タケダイズム(誠実・公正・正直・不屈)という価値観を事業活動の根幹に据えて守り抜き、イノベーションに挑戦し続けてきたことによって築かれたものです。私ならびにタケダのリーダーシップチームの使命は、タケダが将来にわたって世界中の患者さんのニーズに貢献し続けるよう、常に患者さんを中心に考えながら未来への確かな道筋を描き、着実に戦略を実行し、変革をリードすることだと考えています。私たちはこのたび、タケダが目指すべき未来の姿を「ビジョン2025」として明確に打ち出し、その実現に向けた具体的なステップを「戦略ロードマップ」に展開しました。

ビジョン2025では、「消化器系疾患(GI)領域でのNo.1、オンコロジー(がん)におけるトップ10、中枢神経系疾患(CNS)領域および新興国事業での強固なプレゼンス」を長期的な事業の目標とし、これまで以上に患者さんに貢献していくことを目指します。タケダは既に、戦略ロードマップの実行を通じたビジョン実現への歩みを着実に進めています。

戦略ロードマップの4つの柱である「Values(バリュー)」、「People(世界中の人々・仲間)」、「R&D(研究開発への挑戦)」、「Business Performance(事業の持続的成長)」に沿って示した、2015年度の主な成果と2016年度のフォーカスは次の通りです。

Values(バリュー):タケダが進出する全ての国・地域において、コンプライアンス・モニタリング・ポリシーを確立しました。世界の保健医療向上にフォーカスした企業の社会的責任(CSR)施策、ならびに医療システムが発達していない地域を含む世界中にタケダの革新的な医薬品をお届けできるようにする、医薬品へのアクセス向上(Access to Medicine)施策の戦略を立案しました。引き続き、全ての進出国でコンプライアンス遵守を強化するとともに、グローバルな企業市民としての責任を果たしていきます。

People(世界中の人々・仲間):人材育成およびダイバーシティのさらなる推進に向け、3つの新しい人材開発プログラムを開始しました。引き続き、次世代のリーダー人材の育成や、全社における多様性推進に関する取り組みを強化していきます。

R&D(研究開発への挑戦):「オンコロジー(がん)」、「消化器系疾患(GI)」、「中枢神経系疾患(CNS)」の3つの疾患領域そして「ワクチン」を重点領域とし、これらの重点領域にR&D投資を集中することを明確にしました。ノーベル賞受賞者である山中伸弥教授が率いる京都大学iPS細胞研究所との共同研究を開始し、7つの研究プログラムを実施中です。2015年度は、さらに6つの外部パートナーとの共同研究を開始しました。今後は、より強靱で機動的かつ外部連携を強化した研究開発組織の構築に向けて変革を加速し、重点領域における革新的な医薬品の創出を目指します。

Business Performance(事業の持続的成長):2015年度は持続的成長への転換点となり、年間マネジメントガイダンスを2年連続で達成しました。「エンティビオ」「ニララーロ」のグローバル製品や、日本の「タケキャブ」「アジルバ」、および米国の「トリンテリックス」等をはじめとした新製品の力強い業績伸長がタケダの成長を牽引し、成長ドライバーと位置付ける「消化器系疾患(GI)」、「オンコロジー(がん)」、「中枢神経系疾患(CNS)」、「新興国事業」において、対前年で+9.5%の実質的な成長を達成しました。売上収益では、+3.4%、コア・アーニングスでは+8.1%、そしてコアEPSでは+21.7%それぞれ実質的な成長を達成しました。

タケダは、2016年度も変革を継続し、不断の戦略ロードマップ実行によりビジョンの実現と持続的成長に向けた歩みを進めていきます。私たちは1781年の創業以来培われてきた礎を胸に、ベスト・イン・クラスの創薬のグローバルリーダーとなることを目指し、「優れた医薬品の創出を通じて人々の健康と医療の未来に貢献する」というミッションの実現を果たしていきます。

クリストフ・ウェバー
代表取締役 社長CEO

タケダの「アニュアルレポート2016」は
タケダの戦略ロードマップに沿った4つの章で構成しています。
各章において、戦略ロードマップの進捗状況を紹介します。

Values バリュー

235年間、常に患者さんを中心に	12
オンコロジー(がん)領域のリーダーを目指して	15
消化器系疾患(GI)領域におけるイノベーションに挑む	16
世界中の保健医療アクセス向上に貢献する	18

People 世界中の人々・仲間

個々の力を合わせ、強い組織を創りあげる	20
患者さんに新たな価値をお届けする	22
人材育成への取り組み	24
ダイバーシティ&インクルージョンの推進	26
患者さんのニーズに応えるボランティア活動	28

R&D 研究開発への挑戦

イノベーションで、世界を変える	30
フォーカスを絞った世界レベルの研究開発	32
患者さんのよりよい治療に貢献する医薬品を目指して	34
オンコロジー(がん):より多くの治療選択肢を提供するために	36
消化器系疾患(GI):患者さんのより充実した毎日のために	38
中枢神経系疾患(CNS):ニーズに応えるソリューションを生み出す	40
ワクチン:世界中の「いのち」により健やかな日々を	41
京都大学iPS細胞研究所とのパートナーシップ	42

Business Performance 事業の持続的成長

よりよい事業慣行の追求こそ、持続的成長の源泉	44
コーポレートガバナンス	46
トップマネジメント:取締役	47
2015年度業績概況	50
持続可能な開発目標	56
確かな未来に向けて事業における責任を果たす	58
財務情報	60
社会的責任に関する主なデータ	65
会社情報	66



Putting patients first for **over 235 years**

235年間、常に患者さんを中心に

新品種の甘草「都1号」は京都薬用植物園で人工交配を繰り返しながら6年の歳月を費やし育種したもので、日本薬局方に適合する品質の高いものです。現在、甘草は中国からの輸入に頼っていますが、精度の高いトレサビリティを実現できるよう、「都1号」の自社栽培を手がけることになりました。自社で開発した国産甘草の商業化には、備蓄や病害対策などまだまだ課題が残っていますが、ゴールは着実に近づいていると感じています。一日でも早く生活者の皆さんにお届けできるよう、今後も契約農家の皆さんと協力しながら尽力していきます。



吉富 史郎
ジャパン コンシューマー ヘルスケア ビジネスユニット 研究開発部



甘草(カンゾウ)の花

タケダは1781年、和漢薬の仲買商としてのれんを掲げました。
現代においても最も重要な生薬の一つである甘草は、
タケダ235年の歴史の原点でもあります。
撮影:京都薬用植物園(<http://www.takeda.co.jp/kyoto/>)

「妻のリンダとともにこの新しい人生の
日々を、楽しみながら歩んでいきたいと
思います。」

ドン・クレイトンさん
多発性骨髄腫患者。家具メーカーの副社長を定年退職。
サッカーファンであり、マンチェスター・ユナイテッドの熱心
なサポーター。

多発性骨髄腫治療剤「ニンラーロ」*
(イキサゾミブ)の現状
(2016年6月現在)

1,400人以上

同剤で治療を受けた米国の患者さんの人数

80以上

実施中あるいは承認済の臨床試験の数
今後5年以内は7,000人以上の患者さんが
臨床試験に参加予定



Patient-first: Leadership in Oncology

患者さんを中心に考える:オンコロジー(がん)領域のリーダーを目指して

がん患者さんの明るい未来のために

ドン・クレイトンさんは、56歳の誕生日の前日、多発性骨髄腫と診断
されました。人生に対して前向きなドンさんは、妻のリンダさんととも
に、この病気と闘おうと決心しました。幹細胞移植で部分奏効がみら
れましたが、二人が望んでいた完全寛解には至りませんでした。**

タケダのオンコロジー(がん)領域におけるミッション:世界中のがん
患者さんとそのご家族、そして患者さんを支えている医療関係者の
方々の、多様かつ緊急な治療ニーズにお応えする革新的な新薬をお
届けし、がんを治せる病気にする。

タケダは、当社が創出した「ニンラーロ」(イキサゾミブ)が、世界中
の多発性骨髄腫の患者さんの治療に大きな貢献を果たし、タケダの
ミッションを体現するような製品となり得ると考えています。初めての
経口プロテアソーム阻害剤で、何十年にもわたって築かれた多発
性骨髄腫に関する科学と研究の成果が「ニンラーロ」に生かされて
います。米国食品医薬品局の承認後、世界14カ国で「ニンラーロ」
の承認申請をしています(2016年6月現在)。また、欧州医薬品庁
(EMA)の欧州医薬品評価委員会(CHMP)より、「ニンラーロ」の承
認を推奨しないという否定的見解が2016年5月に示されましたが、
この見解を不服とし、CHMPIにおける再審査を要請しました。このプ
ロセスには6ヵ月を要すると予想しています。



タケダは2016年1月に、多発性骨髄腫研究基金およびCURE Media
Groupとともに、同疾患の啓蒙活動と研究資金調達のためのプログラム
「Moving Mountains for Multiple Myeloma(山をも動かすような
強い気持ちで多発性骨髄腫の治療に貢献する、の意)」を発足させました。
発足を記念して、患者さん、医療関係者の方々、支援者として参画した
タケダ従業員を含む計15名が11日間をかけてアフリカ・タンザニアにあ
るキリマンジャロ山頂のウフル・ピークを目指し、見事登頂を果たしました。

「多発性骨髄腫と闘い続けている患者さん、そのご家族、
医療関係者の方々の存在が日々の原動力となり、私たち
タケダの従業員は、『がんを治せる病気にする』という目
標に挑み続けています。」

ライアン・コレップ

タケダ オンコロジービジネスユニット 米国マーケティング部門
バイスプレジデント — 登山プログラムの参加者



** ドンさんの体験は、必ずしも典型的な患者さんの事例を示すものではありません。

* 「ニンラーロ」(イキサゾミブ)は、米国のみで承認されています。(2016年6月現在)

Patient-first: Innovation in Gastroenterology

患者さんを中心に考える:消化器系疾患(GI)領域におけるイノベーションに挑む

患者さんのより健やかな明日のために、 消化器系疾患(GI)のイノベーションに挑み続けます。

元ダンサーかつ体操選手でもあったジャスティン・ゲイルさんは、サイクリングと水泳が大好きです。ラジオやテレビの司会者の仕事をしているため、出張も頻繁にあります。ジャスティンさんは過去に3度、症状が異なる、診断が確定しない腸の異常を経験しました。最初に症状が現れてから約30年後の2014年、米国カリフォルニア州のロサンゼルスで勤務していたジャスティンさんは、救急病院で治療を受けた際、クローン病と診断されました。

ジャスティンさんのような患者さんに、一日も早く革新的な医薬品をお届けしたい—その想いこそがタケダの原動力です。潰瘍性大腸炎やクローン病は、つらい消耗性の疾患です。痛みや不快感、そして病気の進行が予測できないことが、自分らしく毎日を過ごす時間を奪い、仕事への影響や、家族への負担を増やしてしまいます。

適切な治療薬があれば、そのような患者さんの状況を変えることも可能になります。だからこそ、タケダは、「患者さんを中心に考えたイノベーション」に挑み続けます。

タケダは2014年に、腸管に選択的に作用する唯一の生物学的製剤で、中等度から重度の活動期潰瘍性大腸炎およびクローン病治療剤である「エンティビオ」(ベドリズムマブ)をグローバル*で上市しました。革新的な新薬「エンティビオ」は、タケダの炎症性腸疾患(IBD)についての臨床的な理解を大きく進展させており、かつ、2016年のタケダにおける最大のグローバル製品となるものです。「エンティビオ」を通じて、新薬を待ち望まれている世界中の患者さんにさらなる貢献を果たしていきます。



*「エンティビオ」(ベドリズムマブ)は、日本では承認されていません。(2016年6月現在)

25年にわたるタケダの消化器系疾患(GI)領域でのリーダーシップ
タケダは消化器系疾患(GI)の患者さんの健康と生活の向上に貢献するリーディングカンパニーです。消化器系疾患(GI)治療剤のファースト・イン・クラスやベスト・イン・クラスの治療薬を25年以上提供しており、さらなるイノベーションによる進化と、持続的な貢献を目指しています。当社が有する専門性の高い疾患領域の医薬品ポートフォリオの筆頭でもある「エンティビオ」を、より多くの国・地域の患者さんのもとへお届けしていきます。タケダは現在、消化器系疾患(GI)領域において、専門的かつ戦略的な自社開発、外部機関との提携、導入・アライアンスに取り組んでおり、有望な初期パイプラインを数多く有しています。

「毎日の仕事、そして生活のあらゆる面で、自信に満ちた日々を取り戻しました。」

ジャスティン・ゲイルさん
TV・ラジオ パーソナリティ

潰瘍性大腸炎・クローン病治療剤
「エンティビオ」(ベドリズムマブ)の
主要マイルストーン
(2016年6月現在)

40,000人

2014年6月以降、米国・欧州で約4万人の患者さんが「エンティビオ」を使用

50カ国

50カ国の規制当局が承認



「私は約30年にわたり、潰瘍性大腸炎やクローン病をはじめとした、炎症性腸疾患(IBD)の患者さんの治療に取り組んできました。作用機序の異なる新しい治療選択肢が創出されることにより、それぞれの患者さんにより合った治療を選択できるようになります。新薬の貢献により、手術による治療をしなければならない患者さんが一人でも少なくなることを願っています。」

フラビオ・シュタインビュルツ医師**

医学博士、米国消化器学会フェロー ブラジル、サンパウロ市 Albert Einstein and Alemão Oswaldo Cruz病院
ブラジル潰瘍性大腸炎・クローン病協会の創始者

** シュタインビュルツ博士は、武田ブラジル社のアドバイザーとして、ブラジルで実施するタケダの臨床試験プログラム開発に専門的知見を提供しています。

世界の3人に1人の患者さんに、必要な医薬品が届いていないともいわれています。先進国においても、医薬品が届いていないことや、高額な治療費が課題となっています。だからこそタケダは、創薬だけに留まらない、より幅広い医薬品アクセスの向上に貢献することを目指しています。

医薬品アクセス(Access to Medicine, AtM)の向上を目指して
タケダは医薬品アクセスの向上を通じたグローバルヘルスへの貢献に取り組んでおり、新たに「医薬品アクセス (AtM)」戦略を策定しました。東南アジア、ラテンアメリカ、アフリカのサブサハラ諸国における医療制度の整備が不十分な国において、タケダの医薬品を処方された全ての患者さんに対して、治療費の支払い能力にかかわらず、革新的な医薬品を提供するための仕組みづくりに本格的に取り組めます。具体的には、タケダの重点疾患領域でもある、がん領域、消化器専門疾患領域、および Dengue 熱やチクングニア熱などの感染症を対象としたワクチン領域を主な対象として、アクセス改善に向けた革新的かつ持続可能なアプローチにより、アンメットメディカルニーズが最も高い地域の患者さんに対して貢献していきます。

タケダの新たなAtM戦略は、薬剤費への支援に留まらず、医薬品アクセスを妨げるさまざまな課題の解決に包括的に取り組むことを



目指しています。研究開発、医療全般に関わるインフラ強化の支援、企業市民活動などを通じて、医薬品の供給だけに留まらないより幅広い課題の解決に貢献していきます。また、サブサハラ諸国においては、医薬品アクセス向上への取り組みに利益を再投資する事業モデルを構築し、外部パートナーとの協働のもと、スペシャリティケア、および糖尿病や循環器系疾患のプライマリケア医薬品の領域における、基本的な治療へのアクセス向上に取り組んでいきます。

タケダのAtM戦略は、全ての事業活動の中心である患者さんに最大の効果をもたらされることを目指しており、経営陣の主導のもと、推進されています。組織横断的な推進メンバーによりグローバルAtM委員会を構成し、グローバルな運営体制のもとで、戦略の推進ならびに必要なリソース配分を行っています。また、タケダ・エグゼクティブチームのメンバーを含むAtMフォーラムにおいて、タケダのAtM戦略にかかる重要な事項の協議および意思決定を行うとともに、外部のグローバルヘルスの専門家によるアドバイザリーボードを定期的に招聘しています。

「タケダのAtM戦略は、『患者さん中心』という考え方のもと、当社がこれまで取り組んできたグローバルヘルスへの貢献をさらに進展させるものです。アンメットメディカルニーズに応えるべく、医薬品の販売そのものに留まらない、さまざまな取り組みを持続的に実施していきます。」

ジャイルズ・プラットフォーム
エマージング マーケッツ ビジネスユニット プレジデント

CSRプログラムを通じた貢献

タケダは保健医療環境が整えられていない地域や、十分な治療が届けられていない疾患領域において、外部機関と連携し、社会的に弱い立場にある人々の健康の改善と、生活環境の向上を図るCSRプログラムを展開しています。タケダでは目標として掲げている「途上国・新興国の人々の健康に貢献する予防活動」を最も具現化できるプログラムを選ぶために、世界中の全従業員を対象とした投票を行い、下記の3つのプログラムの実施を決定しました。

• **「はしか」予防接種のグローバル展開プログラム**: 国連財団と協働し、アフリカ、アジア、ラテンアメリカなど約40カ国で実施します。10年間で540万人の子どもたちに「はしか」のワクチンを接種する計画です。

• **地域ヘルスワーカーの能力強化を通じた母子保健プログラム**: ワールドビジョンと協働し、インド、バングラデシュ、ネパール、アフガニスタンで実施します。5年間で1,400人の地域医療従事者の能力を強化し、約50万人に保健医療に関する知識とサービスを提供することで、母子の「予防可能な死」を削減します。

• **少数民族の母子を対象にした保健支援プログラム**: セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンと協働し、ミャンマー、ベトナム、ラオスで実施します。アジア少数民族の保健医療のアクセスとクオリティを向上するため、関係保健当局と連携しながら5年間で4万人の少数民族の母子を含む15万人の地域住民へ保健教育、研修、サービスを提供します。

これらに加え、プラン・インターナショナル・ジャパンと協働でケニア政府が推進する「**デジタル出生登録プログラム**」を3年間にわたって支援します。このプログラムは、子どもたちの人権を守り、保健医療や教育を受ける機会を広げる重要な取り組みとなります。



People

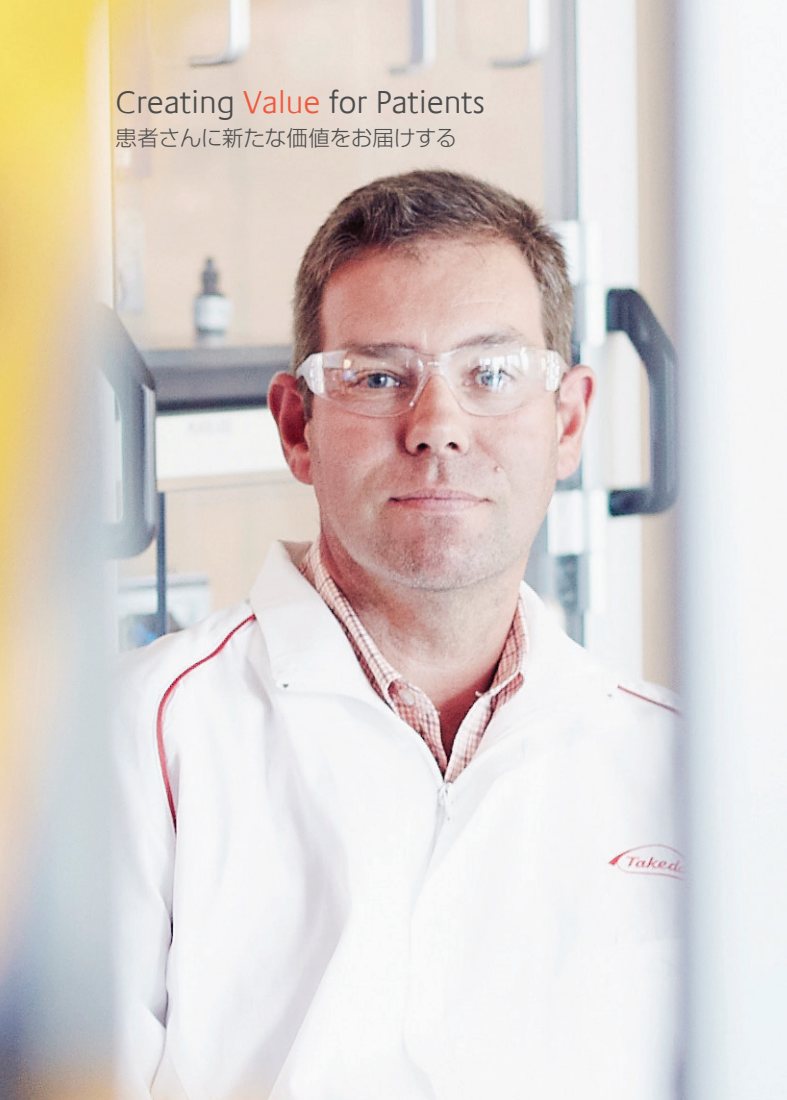
Together we are stronger

個々の力を合わせ、
強い組織を創りあげる



クリストフ・ウェバー社長CEOとタケダ・エグゼクティブ・チームメンバー(2016年7月撮影)

(起立 左から)本田信司、ラモナ・セケイラ、平手晴彦、
マーク・プリンセン、ジャイルズ・プラットフォーム、
トーマス・ウォスニフスキー、デイビッド・オズボーン、岩崎真人、
中川仁敬、ラジーヴ・ヴェンカヤ、クリストフ・ピアンキ
(着席 左から)アンドリュー・ブランブ、クリストフ・ウェバー、
ジェラード・グレコ、ジェームス・キーホー



「ミレニアム社に入社してから一貫して研究職を続けています。その中で、私は、タケダが大きく成長していることを実感してきました。人材、組織力、そして数年前では考えられなかったような問題を解決する力などです。私は、生物学、化学、工学、およびITといった複数の分野が重なり合う領域で、革新的かつ実用的なソリューションの構築に取り組んでいます。命に関わる病気と闘う患者さんに新しい治療選択肢を提供するため、創業に取り組むタケダの研究者チームの一員であることを大変誇りに思っています。」

ベン・ナイト

シニアサイエンティスト II 創業技術
米国

「ブラジルでは、医師と医療関係者が連携して患者さんのケアに取り組んでいます。効果のある治療法が見つからなかった患者さんに対して、新たな選択肢を提供できることに、本当にやりがいを感じています。炎症性腸疾患 (IBD) の患者さんは生活するだけでも大変で、時には身体的痛みが伴うこともあります。患者さんの症状を改善したり、手術を回避できるように努めることは、とても重要な仕事だと思います。」

ワン・リー・ピーニョ

ブラジル&ラテンアメリカ サイエンティフィック アフェアーズ ヘッド
ブラジル

「私の仕事は、患者さんに高品質で安全な医薬品をお届けすることです。タケダには、新しいアイデアや、問題を迅速かつ効率的に解決するための改善策を全ての従業員が提案できるプログラムがあります。私は入社して10ヵ月ですが、このプログラムが、私たちが日々直面する課題の解決に役立っていることを実感しています。ここドイツのオラニエンブルクでは、世界中の工場の従業員と密に連絡を取り、知識を共有しながら、各工場のコア・コンピテンシーの継続的向上に努めています。」

ジャン・ヘンドリック・エルトマン

トランスナショナル ネットワーク マネージャー
ドイツ

「日々の業務では、一人ひとりの患者さんとそのご家族を常に中心において意思決定するよう心がけています。メンバーにも、迷った時には『それは患者さんのためになるのか』と自らに問い、行動するように伝えていきます。そうすることで、優れたタケダMRとして成長していけると確信しています。メンバーの成長する姿を見ることが一番の喜びであり、私のやりがいです。メンバー全員が日々笑顔で仕事に取り組み、成長していける組織を作ること、それが所長としての私の役目だと考えています。」

矢澤 亜紀

ジャパン ファーマ ビジネスユニット 湘南営業所 所長
日本

Attracting and Developing Talent

人材育成への取り組み

一人ひとりの成長が、 強い組織を創りあげる

タケダでは、医薬品を通じて人々の健康に貢献するという目標のもと、従業員がともに切磋琢磨する機会に溢れた職場環境の整備を進めています。優れた医薬品を待ち望む患者さんやそのご家族はもとより、医薬品を創出する従業員に対しても常に誠実に向き合うことで、「タケダイズム(誠実・公正・正直・不屈)」を徹底して実践しています。世界中の多様な専門性・文化的背景を持つ従業員一人ひとりの力をあわせ、強い組織を創りあげています。

タケダが患者さんの健康にさらなる貢献を果たす企業となるには、人材育成への継続的取り組みが欠かせません。一人ひとりのスキル・知識をさらに高める人材育成プログラムを立ち上げ、未来のタケダと製薬業界を牽引するリーダーの育成に注力しています。

人材開発の取り組み

タケダのグローバルな人材育成プログラム

- **プレジデント・フォーラム** 当社事業を牽引する未来のリーダーを現経営幹部が育成(2015年～)
- **アクセラレーター・プログラム** 高いポテンシャルを持つ従業員のインターナショナルかつ部門横断的なキャリア構築を促進(2016年～)
- **タケダ・リーダーシップ・プログラム** 当社事業について社内外の視点から議論することを通じてリーダーシップ能力を向上(2016年～)
- **グローバル・インダクション・フォーラム** 最近入社したシニア・リーダーへの入社研修(2015年～)

優先的に育成投資を行う人材の特定および主要なプログラム

育成対象	人材育成プログラム	育成フォーカス
変革を牽引するリーダー	プレジデント・フォーラム	タケダ・リーダーシップ・ビヘビア
中堅社員層における将来のリーダー候補	タケダ・リーダーシップ・プログラム グローバル・インダクション・フォーラム	
キャリア形成早期のハイポテンシャル人材	アクセラレーター	グローバル・コア・コンピテンシー
現場マネージャー／担当者	部門・機能・地域ごとの育成プログラム	



これらグローバルな育成プログラムに加え、部門・機能の業務ニーズに合った独自のリーダーシップ・アカデミーや人材育成プログラムを多数展開・実施しています。

リーダーシップ・ビヘビア

タケダの変革を次なるステージへと推し進めるには、一人ひとりが期待される業績、行動、会社の戦略について理解することが重要です。2015年度には、未来に向けて事業を牽引するリーダーに求められる4つの要素を定義付けました。

- 患者さんへの貢献、社会との信頼関係構築、レピュテーションの向上、ビジネスの発展を実現する革新的な方策を見出すため、会社全体を見渡す戦略的思考を実践する
- 組織を成長させることに従業員がモチベーション高く取り組める環境を作る
- 最も重要な優先事項を絞り込み、優れた成果を導き出す
- 現在および未来のために、組織の能力を向上させる

グローバル・コア・コンピテンシー

タケダのビジョンと長期的な成功の実現に欠かせない、従業員一人ひとりの育成を促すため、グローバルの全従業員に共通のコンピテンシー(行動特性)を策定しました。

多様な視点が繰り出す創意ある成果

タケダのダイバーシティ&インクルージョン(D&I)のステートメント:タケダは、私たちが貢献すべき患者さんが多様であるのと同様に、多様な従業員が活躍できるよう努めています。私たちは従業員の個々の違いを受け入れ、その可能性を探求し、育成することにコミットしています。私たちの成功は、従業員の個々の意見や才能を活かすために、従業員が受け入れられ、自信を持ち、活気にあふれる環境を作り出すことにかかっています。これが患者さんやタケダの医薬品を待ち望んでおられる医療関係者の皆さん、コミュニティに貢献するための革新的なアプローチを見つける方法だと信じています。これは、私たちが最高のポテンシャルを引き出す方法でもあります。

ダイバーシティ(多様性)が組織の創造力を高め、イノベーションをより多くもたらし、多様性に富んだリーダー層が率いる企業が幅広いグローバルな経営課題により効果的に対応できるといわれています。イノベーション主導の研究開発型グローバル企業であるタケダが、長期にわたりより健やかで明るい未来の実現に貢献するためにはダイバーシティの推進が極めて重要となります。

タケダは、従業員一人ひとりが性別、年齢、国籍、人種、セクシュアル・オリエンテーションに関わらず、それぞれの能力と熱意に応じた成長の機会を提供できる企業であることを目指しています。タケダイズム(誠実・公正・正直・不屈)に基づき、従業員の豊かな多様性もたらすユニークな視点を活かし、世界中の患者さんにより一層貢献していきます。



タケダは、日本をはじめその他の国々においてもダイバーシティ&インクルージョンの取り組みを加速しており、性別、ワークスタイル、年齢、キャリアにおける多様化を促進しています。

- 女性従業員同士で学び合い、知識・情報を共有しながら、キャリア形成をサポートしあえるネットワーク「はなみずき」を始動(日本)
- フレキシブル・ワークスタイルプログラムを導入し、就業時間や就業場所の選択肢をより幅広く設定し、従業員の働きやすさを向上(日本)
- 高いパフォーマンスを発揮する従業員の早期昇進を促すことでキャリアの多様化を促進(日本)
- 米国で第一回タケダダイバーシティ週間およびリーダーシップ・シンポジウムを開催。ダイバーシティ&インクルージョンを牽引するリーダーたちが集まり、基調講演やワークショップを実施(米国)

2016年度 日本の目標値

30%

新任幹部社員に占める女性の割合

10%

新任幹部社員に占める経験年数8年未満の従業員の割合



Voluntary Activities **Directly Address Patients' Needs**

患者さんのニーズに応えるボランティア活動

タケダの従業員は日々世界中で、ビジネスの枠組みを越えて、人々の生活の質の向上と、子どもたちの健康を支援するために、保健医療の改善に取り組んでいます。タケダは、創薬だけに留まらない貢献を目指して、ボランティア活動を推進しています。



ブラジル: 次世代の支援
ブラジル国内の24都市で、240名の従業員がさまざまなボランティア活動を展開しています。子どもたちに向けて、歯磨きや手洗いの講座などの健康啓発活動を実施しました。



中国: がんデータベースの構築支援
前立腺がんの患者さんの治療と診断を改善するため、中国ではChina Wu Jieping Medical Foundationへの協賛を通じて前立腺がんデータベースの構築を支援しました。



ロシア: 脳卒中の患者さん支援
ロシアでは、脳卒中の患者団体とともに、疾患を経験された患者さんのための公開セミナーや脳卒中の啓発活動を継続的に実施しました。



南アフリカ: 栄養改善の支援
南アフリカでは、「Africa Food for Thought」への支援を通じて、子どもたちの栄養改善プロジェクトをサポートしています。



フランス: 希少疾患の啓発活動
仏フリードライヒ失調症協会(AFAF)のボランティア活動に参加し、希少疾患と闘っている患者さんご家族を支援するとともに、疾患の啓発活動にも努めています。



インドネシア: 地域の人々の健康支援
Bekasi工場では、従業員が主体となって、周辺の住民を対象に無料の健康診断を実施しました。産業医にも協力をいただき、4歳から80歳まで合計129人の方々が診察を受けました。



サウジアラビア: がん患者さんの支援
サウジアラビアの従業員は、がん患者さんを支援するチャリティイベント「Coffee Morning」に参加しました。このイベントを通じて集められた寄付金は、がん患者さんの治療費として活用されます。



米国: コミュニティへの貢献
Deerfieldオフィスでは、健康や科学教育の促進のために活動している地域のNPOを支援するランニング/ウォーキングイベント「Takeda Cares Day」を毎年開催しています。



日本: がん患者さんご家族の支援
全国で開催されている、がんを闘う患者さんやそのご家族を応援するチャリティウォーキングイベント「リレー・フォー・ライフ」に、100人以上の日本の従業員たちが参加しました。



メキシコ: 栄養改善の支援
メキシコでは、NGO「Un Kilo de Ayuda」を通じて、子どもたちの栄養改善プログラムへの支援を行っています。2014年には、鉄分が補給できる「Ferranina」を寄贈したほか、お絵かきコンテストなども実施しました。



「患者さんや地域に貢献する活動ほど、やりがいのあることはありません。特に、学生や子どもたちと一緒に活動する喜びは、とても大きなものです。」

El Hassan Mohamed
サウジアラビア従業員

How our innovation transforms lives

イノベーションで、世界を変える

「タケダのミッションは、何よりもまず、患者さんに貢献することです。研究開発においても、患者さんを第一に考えることにより、患者さんが必要とする医薬品を創出し、真に患者さんの生活の質向上に貢献することができます。」

アンドリュー・ブランブ

チーフ メディカル&サイエンティフィック オフィサー



画期的な変化をもたらす研究

サイエンスと医薬品の飛躍的な進歩により、より高度なイノベーションが求められるようになりました。

タケダは、患者さんを中心に考える戦略、ワールドクラスの研究開発でニーズに応えていきます。

タケダは、業界トップの研究開発組織となることを目指しています。すなわち、考え、行動し、外部機関と連携する、他に類のないダイナミックな組織です。患者さんに真のイノベーションをもたらす治療に向けた最先端のサイエンスにフォーカスすることで、その目標を達成します。そのために、重点疾患領域での高度な専門性の構築、パイプラインの強化、互いを高め合える組織文化の醸成などに取り組んでいます。

「タケダは単なる『創業』を超えて、さらに可能性を追求します。患者さんのより健やかな未来のために、イノベーションに挑み続けます。」

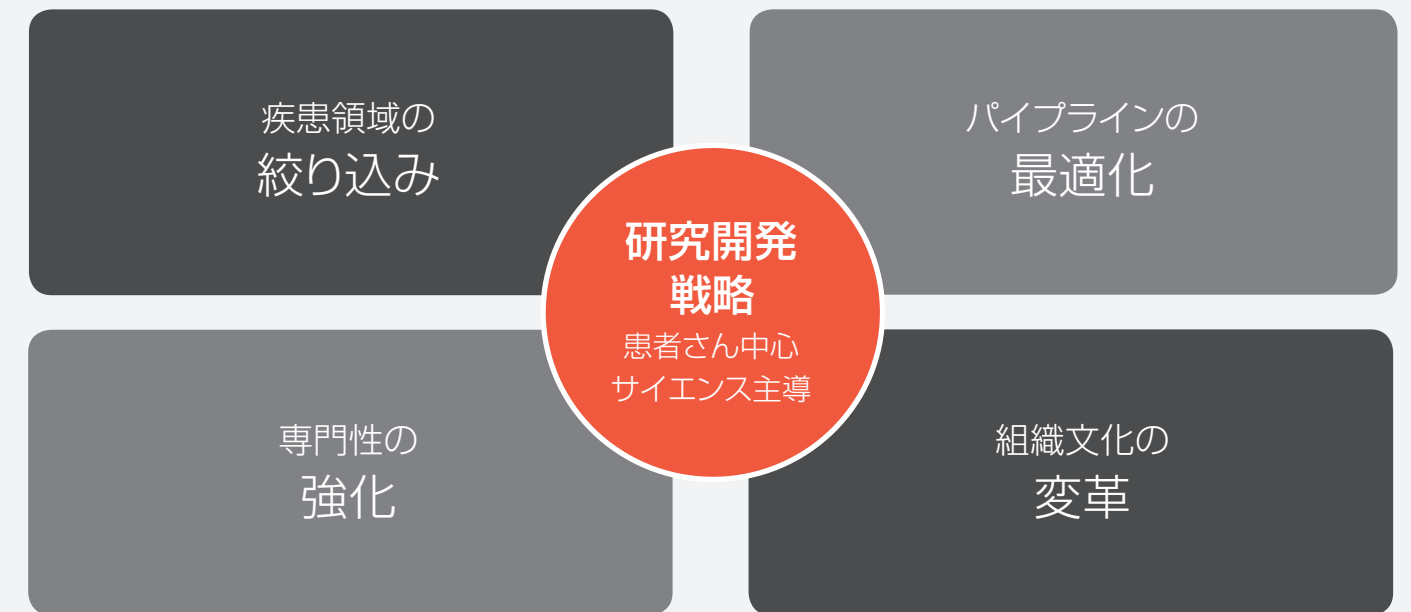
アンドリュー・ブランブ
チーフ メディカル&サイエンティフィック オフィサー



重点疾患領域



タケダの研究開発戦略



イノベーションを最大化する取り組み:

- **疾患領域の絞り込み:** オンコロジー(がん)、消化器系疾患(GI)、中枢神経系疾患(CNS)を重点疾患領域として、イノベーションの最先端を目指します。これらの領域は、患者さんのニーズが高く、タケダの高度な専門性とこれまでの実績に基づく経験で、革新的な新薬の創出に取り組んでいます。またワクチン領域では Dengue 熱や ノロウイルスのプログラムを通じ、グローバルヘルスへの貢献を続けていきます。
- **パイプラインの最適化:** 患者さんに貢献するために、重点疾患領域を絞り込み、新たな開発品の導入などによりパイプラインの最適化を戦略的に実施しました。その結果、臨床第I相および第II相の有望な開発プログラムを強化し、既存パイプラインの加速化および革新的な外部機関とのパートナーシップによって臨床第III相パイプラインを再構築しています。また、重要な開発品としてタケダは Dengue 熱ワクチンを有しており、世界中の人々への大きな貢献が期待されています。

パイプラインの詳細は、タケダのホームページに掲載しています。
www.takeda.co.jp/research/pipeline

- **専門性の強化:** 高分子や細胞治療などのモダリティ(手法)の多様化、ゲノム研究およびデータサイエンス、トランスレーショナルメディスンによって重点領域の専門性を強化しています。社内のワールドクラスの研究者と外部イノベーターとの連携による相乗効果を生み出すために、タケダの研究フォーカスと合致する外部の最先端企業・アカデミアとのコラボレーションやパートナーシップを通じ、イノベーション・ネットワークを拡大しています。タケダは、イノベーションの実現とパイプラインの強化に向けて、自社とパートナーとのコラボレーションを推し進め、患者さんに大きな成果をもたらす強固なパートナーシップに基づくダイナミックなイノベーション・ネットワークを構築しています。
- **組織文化の変革:** リーダーシップ、機動性、パートナーとの緊密な連携、そして業界内部および外部環境のトレンドをつかむことによって、組織文化の変革を推進しています。リーダー育成に向けて起業家精神を育み、患者さんに最良の成果をもたらすために従業員の専門性を高めています。機会と責任を分かち合い、互いを高め合える組織文化を醸成しており、すばやく決断し完璧に実行できることがタケダの強みです。

イノベーションに対するニーズの高まりに応える
革新的なテクノロジーの活用と疾患領域の絞り込み

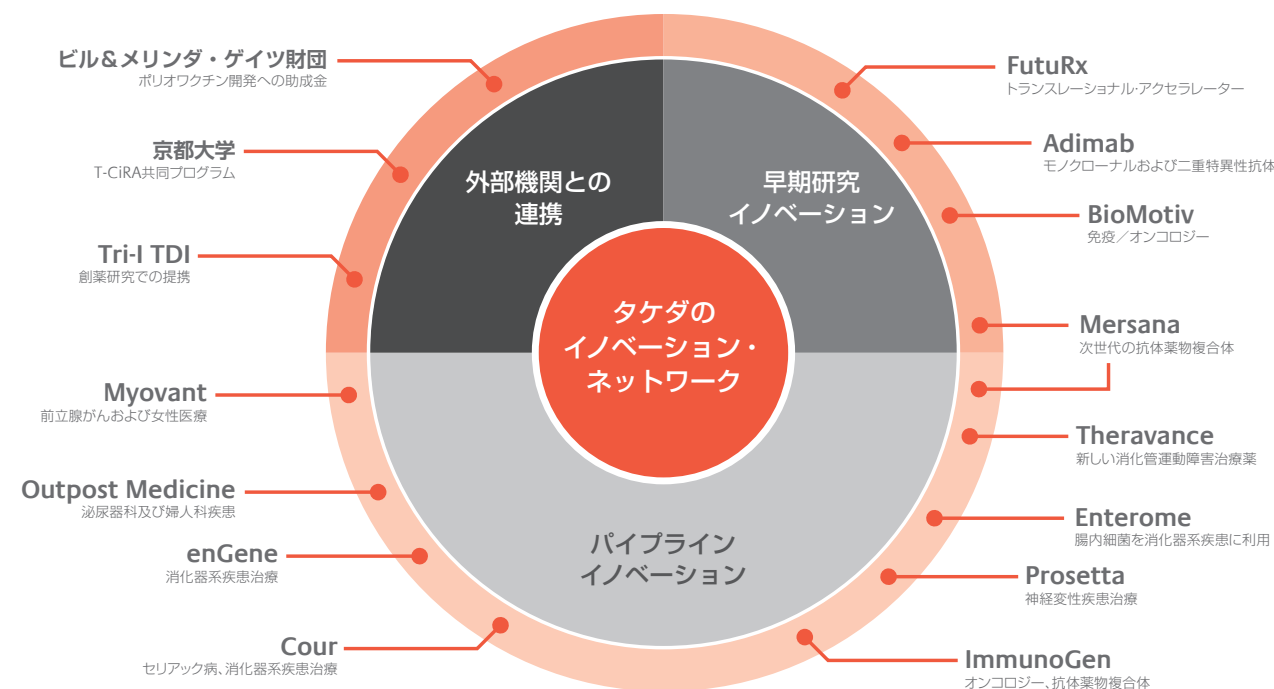
新たなモダリティ(手法)は、新たな治療の可能性を広げます。患者さんを中心に考える、サイエンス主導の企業として、タケダは従来の治療法に関連する低分子化合物を引き続き開発すると同時に、高分子化合物やより複雑なモダリティに関する研究や外部との連携を推進することにより、患者さんのより健やかな生活に貢献することを目指しています。

タケダは、既に自社での研究やパートナーシップにおいて、多様化したモダリティの取り込みを進めています。**モノクローナル抗体**は、抗体薬物複合体の創製につながり、個別化医療とバイオマーカーの活用を促進します。**腸内細菌**は消化管運動を改善し、炎症を取り除き、**遺伝子治療**は炎症性腸疾患 (IBD) 治療に活用できます。**遺伝子組換えタンパク質**はより高度な分子標的が期待でき、**細胞治療**はT細胞免疫療法を実現し、幹細胞技術の進展を後押しします。**予防ワクチン**は新興国や先進国での感染症対策に、**治療ワクチン**はセリアック病の治療に貢献します。



このような新しいモダリティに基づく差別化された医薬品は、バイオテクノロジー企業、非営利団体やアカデミアによって開発が加速されています。タケダは新しいモダリティの力を患者さんの治療に役立てるために、これらのパートナーとの強力なイノベーション・ネットワークを構築しています。

研究開発における成功はタケダの戦略ロードマップの重要な要素であり、機動性とイノベーションを通じてベスト・イン・クラスのパフォーマンスを生み出す原動力となっています。研究開発へフォーカスすることで、サイエンスにおける発見を、世界中の患者さんへの貢献につなげています。



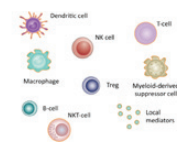
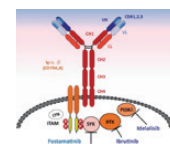
オンコロジー(がん)

より多くの治療選択肢を提供するために

価値最大化

優先順位付け

提携



「ニンラーロ」、「アドセトリス」をより多くの患者さんのもとへ届ける

画期的な潜在力のある重要なパイプラインに集中し、差別化のハードルを高く設定する

特に抗体薬物複合体とがん免疫療法において、パートナーシップを通じて研究開発力を強化する

オンコロジー領域における躍進

2025年に オンコロジーでトップ10、血液がんでトップ5の企業になることが、タケダの「ありたい姿」です。

オンコロジー領域のパイプラインには、臨床初期段階のプロジェクトが充実しており、固形がんや血液がんにおける新たな治療アプローチも含まれています。多発性骨髄腫治療剤「ニンラーロ」(イキサゾミブ)と悪性リンパ腫治療剤「アドセトリス」(ブレントキシマブ ベドチン)は、引き続き画期的な治療選択肢として患者さんに貢献しています。初めての経口プロテアソーム阻害剤として創製された「ニンラーロ」は、多発性骨髄腫の治療における専門的知見を積み重ねることによって、新たな革新をもたらしました。「アドセトリス」はグローバルで標準治療となりつつあり、64カ国で承認され27,000人以上の患者さんに投与されています(2016年6月現在)。また、ホジキンリンパ腫・全身性未分化大細胞リンパ腫の治療において、非常に良好な結果をもたらす可能性があります。臨床初期段階の開発パイプラインには、革新的な経口血液がん治療剤となる可能性を持つSYK/FLT-3デュアル阻害薬「TAK-659」があります。

血液がん領域でのプレゼンス拡大に伴い、抗体薬物複合体(ADCs)の研究開発も進めています。ADCsは、標的腫瘍にピンポイントで作用するため、患者さんにとってより安全で効果的な治療を提供できます。また、自社開発品および戦略的パートナーシップを通じ、生物学的製剤の先進的なプラットフォームや技術を活かしたがん免疫療法にも取り組んでいます。この分野は急速に発展しており、タケダはより多くの患者さんにその成果をお届けするために、最先端の取り組みを進めています。タケダのがん免疫療法の研究開発戦略では、T細胞チェックポイント以外のターゲットの特定にも注力しています。

タケダは、より効果的ながんの治療法を提供することで、世界中の人々の未来に貢献していきます。

タケダは、がんを治せる病気にすることを目指しています。タケダは、サイエンス、イノベーション、情熱によって、がん患者さんの治療選択肢を広げ、生活の質の向上に貢献していきます。



消化器系疾患 (GI)

患者さんのより充実した毎日のために

消化器系疾患 (GI) の患者さんは、若くて健康で、家庭生活や仕事でも多忙な日々を送っている時に病気を患うケースが多く見られます。タケダは、この疾患領域における長年のリーディングカンパニーとして、患者さんが健康を取り戻し生き生きと生活できるような新しい治療法を追求しています。

価値最大化

優先順位付け

提携



「エンティビオ」を礎に、患者さんに真の価値をもたらす多様なポートフォリオを最大化する

がん関連疾患における「エンティビオ」の可能性の検討、次世代の炎症性腸疾患 (IBD) 治療薬、消化器系疾患創薬ユニットなど革新的なサイエンスを促進する

新しいアイデアに関して、外部機関との提携を通じた有望な初期パイプラインを構築し、腸管運動障害、肝疾患、セリアック病、腸内細菌などに対応する

多くの国で、潰瘍性大腸炎・クローン病治療剤「エンティビオ」(ベドリズムブ)は、患者さんの未来を変えています。特異的結合作用で腸管炎症部位へのTリンパ球の移行を阻害するため、症状が緩和され、患者さんの生活の質の向上につながります。

「エンティビオ」の優位性は、長期安全性、有効性データによって実証されています。タケダは、継続的な臨床プログラムを実施することにより強力なデータセットを構築し、消化器系疾患の理解を深め、これらの知見を確実に患者さんの治療につなげるようにしています。「エンティビオ」は上市してまだ間もないですが、現在の適応症以外の多様な消化器系疾患の治療に活用できるよう研究開発を進めています。

日本で上市した酸関連疾患治療剤「タケキャブ」(ボノブラザン)は、患者さんのニーズへのさらなる対応を進めています。迅速かつ持続的な酸中和効果により、7つの酸関連疾患適応症で承認を取得しており、その他の適応症についても臨床試験を検討しています。「TAK-828」は、炎症性腸疾患 (IBD) に向けたファーストインクラスの化合物で、Th17細胞として知られるリンパ球が関連する疾患に作用し、免疫系のバランスを回復します。2016年に臨床第I相単回投与用量漸増試験を終了し、臨床第Ib相反復投与用量漸増試験を開始しました。



中枢神経系疾患(CNS)

ニーズに応えるソリューションを生み出す

価値最大化	優先順位付け	提携
		
「トリンテリックス」*を礎に大うつ病の治療に対する能力を高め、大うつ病やその他の精神疾患における認知機能改善のデータを構築する	優れた科学的知見を優先し、患者データを活用して強固なトランスレーショナル手法を構築する	外部からイノベーションを取り込み、中枢神経系疾患(CNS)の開発初期段階のパイプラインを強化する

*「トリンテリックス」は2016年6月より米国における製品名を「プリンテリックス」より変更して販売しています。

中枢神経系疾患(CNS)は従来より治療が難しい疾患で、効果的な治療選択肢も、疾患についての適切な理解も不足していました。タケダは、生物学的見地からの疾患への新たな理解、先端技術、診断ツールを活用するとともに、自社の低分子化合物研究における強みを活かすことで、この疾患領域の現状を大きく変えようとしています。中枢神経系疾患(CNS)領域では、十分な治療薬のない神経精神疾患である統合失調症、うつ病、特定神経疾患に注力しています。

タケダは、**中枢神経系疾患(CNS)領域でのグローバルプレーヤー**を目指しています。「トリンテリックス」や開発初期段階のパイプラインを通じて精神疾患でのプレゼンスを拡大するとともに、提携と共同開発を通じて神経疾患における強い技術・専門性を構築します。精神疾患および神経疾患の両分野において、長期におけるイノベーション主導の成長を見込んでいます。

患者さんが必要とする進歩

うつ病 — 「トリンテリックス」(ポルチオキセチン)は効果的な大うつ病治療剤で、うつ病患者さんを対象とした臨床試験において認知機能と身体機能の改善効果を示しました。うつ病患者さんの約3分の2がこれらの症状で苦しんでおり、新しい作用機序によりこれまでの標準的薬剤では十分に治療できていなかった認知機能障害を改善します。

統合失調症 — 中枢神経系疾患(CNS)創薬ユニットから革新的な開発初期段階の新規候補化合物を創出しています。「TAK-831」は現在臨床第I相試験を実施中のD-アミノ酸化酵素阻害薬で、統合失調症に伴う認知機能障害および陰性症状に対する新規治療薬としての可能性を有しています。

ワクチン

世界中の「いのち」により健やかな日々を

価値最大化	優先順位付け	提携
		
パンデミックインフルエンザワクチンなど、ワクチン開発・製造・販売の全機能を有する日本の ポテンシャルを最大化 する	ワクチン 領域で最も画期的な 後期パイプライン である Dengue熱ワクチン「TAK-003」 および ノロウイルスワクチン「TAK-214」 の開発を推進する	グローバルなニーズ に対応するため、提携を通じた製造技術の活用により生産能力を拡大し、全ての地域に貢献する

感染症対策は全世界で大きな課題となっています。タケダは、この課題に立ち向かうべく、 **Dengue熱ワクチン**と**ノロウイルスワクチン**を開発しています。

ワクチンは、年間何百万人もの命を救う費用対効果の高い優れた医療の一つです。タケダは世界トップレベルの開発力を駆使し、世界中の人々が抱える大きな健康課題に対応します。

Dengue熱

Dengue熱は「最も重要な蚊媒媒介性ウイルス疾患」と言われています。毎年4億人がDengue熱に感染し、世界人口の40%以上に当たる39億人がDengue熱感染リスクにさらされています*。世界的に脅威が増しており、米国、日本、南ヨーロッパにも感染が拡大しています。Dengue熱ウイルスの4つの型全てに対して予防効果があり、全ての人々に対して安全で有効なワクチンが必要とされています。

タケダの新薬開発は、トランスレーショナルサイエンスと正確な臨床評価に基づいています。

「TAK-003」は有望な次世代の4価Dengue熱ワクチンです。4つのDengue熱血清型全てに対し、感染歴の有無に関わらず、持続的な抗体反応を誘導します。最適な接種スケジュールは、Dengue熱流行国に渡航するDengue熱に未感染の旅行者を含む、全ての集団において、2回接種(3ヵ月間隔)と考えられています。「TAK-003」は、これまで検討した全ての対象集団において、期待通りの安全性プロファイルを示しています。

ノロウイルス

毎年ノロウイルスは世界中の胃腸炎の主要な原因となっています。のべ6億人以上が下痢症を発症し、20万人以上が亡くなっています。また、600億米ドル以上の経済的負担**が発生しており、公衆衛生当局から安全性および有効性の高いワクチンが求められています。タケダの「TAK-214」は、臨床試験段階にある唯一のワクチンです。

出典: * http://www.who.int/whr/1996/media_centre/executive_summary1/en/index9.html
** Lopman BA, 2016/Bartsch SM 2016

Partnership with Kyoto University's Center for iPS Cell Research and Application

京都大学iPS細胞研究所とのパートナーシップ

タケダは、京都大学iPS細胞研究所(CiRA)とiPS細胞技術の臨床応用を目指して提携しています。

T-CiRAは2015年から10年間にわたる共同研究プログラムで、医療の未来に変革をもたらすことを目指しています。

タケダは、「京都大学iPS細胞研究所(CiRA)」*と、iPS細胞技術の臨床応用に向けた共同研究契約、「武田-サイラ共同プログラム(T-CiRA)」を締結しました。iPS細胞技術は医療の未来に画期的な変革をもたらす可能性があり、その応用は細胞治療、創薬研究、薬物安全性評価など多岐にわたります。

CiRAの先鋭的なサイエンスとタケダの研究開発の知見を統合することで、T-CiRAでは特にがん、心不全、神経変性疾患、1型糖尿病、難治性筋疾患などの深刻かつ生命に関わる領域を中心に、革新的な治療の選択肢を提供し、患者さんのアンメットメディカルニーズに応えることを目指します。

*2010年に国立大学法人京都大学内に設立された、世界初のiPS細胞に特化した研究機関。iPS細胞を用いた再生医療の実現と創薬研究を目指し、細胞のリプログラミング、ヒト発生、臨床応用および生命倫理についての基本科学研究を行っています。



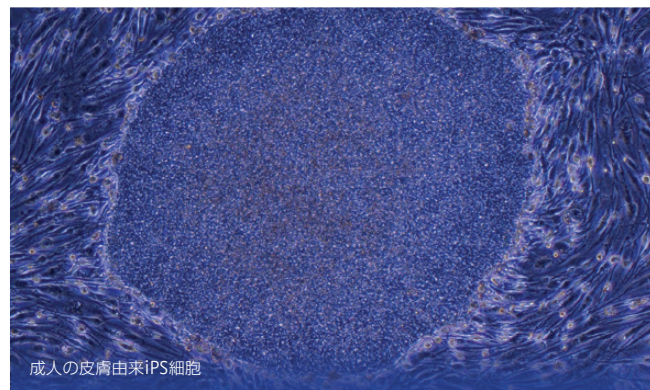
このプログラムはタケダの湘南研究所(藤沢市)を拠点とし、幹細胞研究でのノーベル賞受賞者である山中伸弥CiRA所長が主導しています。

現在進行中のプロジェクト:

- 細胞傷害性Tリンパ球療法を利用したがん免疫療法の開発
- 1型糖尿病に対する再生医療開発
- 心疾患創薬プラットフォームの開発と心不全の新規治療開発への応用研究
- 筋萎縮性側索硬化症(ALS)に対する創薬研究
- 難治性筋疾患に対する創薬研究
- 先天性筋疾患に対するゲノム編集遺伝子治療法開発
- ヒトiPS細胞由来神経堤細胞を用いた基盤研究と再生医療・創薬への応用研究

〈iPS細胞とは〉

人間の皮膚などの体細胞に、極少数の因子を導入し、培養することによって、様々な組織や臓器の細胞に分化する能力とほぼ無限に増殖する能力をもつ多能性幹細胞に変化します。この細胞を「人工多能性幹細胞」と呼びます。英語では、「induced pluripotent stem cell」と表記しますので頭文字をとって「iPS細胞」と呼ばれています。



「iPS細胞技術をツールとして用い、創薬および難治性疾患の画期的な治療法の創出に対する新たなアプローチの開発に向け、今後10年にわたり研究を実施します。」

山中伸弥教授
CiRA所長

「この重要な研究プログラムに参加できることは当社にとって誇りです。本共同研究により、当社は、疾患治療において細胞治療および遺伝子的戦略を追求する製薬企業へと変革することを目指します。」

クリストフ・ウェバー
武田薬品 代表取締役 社長CEO

Business Performance

Best practice for better performance

よりよい事業慣行の追求こそ、
持続的成長の源泉

2018年春竣工に向けて、新社屋を建設しています。

完成予想図
右:東京日本橋地区の建設現場付近(2016年7月撮影)



事業運営体制の充実に向けて

グローバルに強靱な体制へ

タケダは、「優れた医薬品の創出を通じて人々の健康と医療の未来に貢献する」というミッションのもと、グローバルに事業展開する世界的製薬企業にふさわしい事業運営体制の構築に向け、健全性と透明性が確保された迅速な意思決定を可能とする体制の整備を進めるとともに、コンプライアンスの徹底やリスク管理を含めた内部統制の強化を図っています。これら取り組みを通じて、コーポレートガバナンスのさらなる充実を目指し、企業価値の最大化に努めていきます。

タケダは、2016年6月、「監査役会設置会社」から「監査等委員会設置会社」へと移行し、取締役会における社外取締役の構成比と多様性をさらに高めました。

新体制では、監査等委員が取締役として取締役会での議決権を有し、適切に行使します。また、取締役会の過半数を超える多様な社外取締役を置くことで、経営の監督機能の強化を図り、意思決定の透明性・客観性の向上を図ります。

また、監査等委員会設置会社の取締役会に認められた業務執行に関する決定権限を取締役に委譲することで、取締役会は最重要案件・戦略的案件に集中して十分な時間をかけ審議を行います。

これらを通じて、取締役会と代表取締役との間の適切かつ効率的な役割分担を実現し、グローバルに事業を展開する世界の主要企業と遜色ない意思決定体制を整えていきます。

コーポレートガバナンスの体制

タケダは、取締役会においてタケダグループの基本方針を定め、その機関決定に基づいて経営・執行を行う体制をとっています。また、監査等委員会による監査を通じて取締役会の透明性を確保するとともに、

社外取締役の起用により、業界の常識に囚われることなく適切に業務を執行する体制を目指しています。

さらに、多様化する経営課題に機動的かつ迅速に対応するため、社長CEOのもとに、タケダグループの各機能を統括するメンバーで構成されるタケダ・エグゼクティブ・チームを設置するとともに、ビジネス・レビュー・コミッティー（一般的な経営案件を所管）、ポートフォリオ・レビュー・コミッティー（研究開発および製品関連案件を所管）および監査・リスク・コンプライアンス・コミッティー（内部監査、リスク管理およびコンプライアンス案件を所管）を設置し、各機能間の一層の連携と、より迅速で柔軟な業務執行が行われる体制を確保しています。

トップマネジメント 取締役

取締役会長



長谷川 閑史
取締役会長

取締役



クリストフ・ウェバー
代表取締役
社長CEO



本田 信司
取締役
コーポレート戦略
オフィサー



岩崎 真人
取締役
ジャパン ファーマ ビジネス
ユニット プレジデント



アンドリュー・ブランブ
取締役
チーフ メディカル&
サイエンティフィック
オフィサー

社外取締役



藤森 義明
社外取締役



東恵 美子
社外取締役



ミシェル・オーシンガー
社外取締役



坂根 正弘
社外取締役



志賀 俊之
社外取締役



数土 文夫
社外取締役

監査等委員である取締役



山中 康彦
取締役
監査等委員



国谷 史朗
社外取締役
監査等委員長

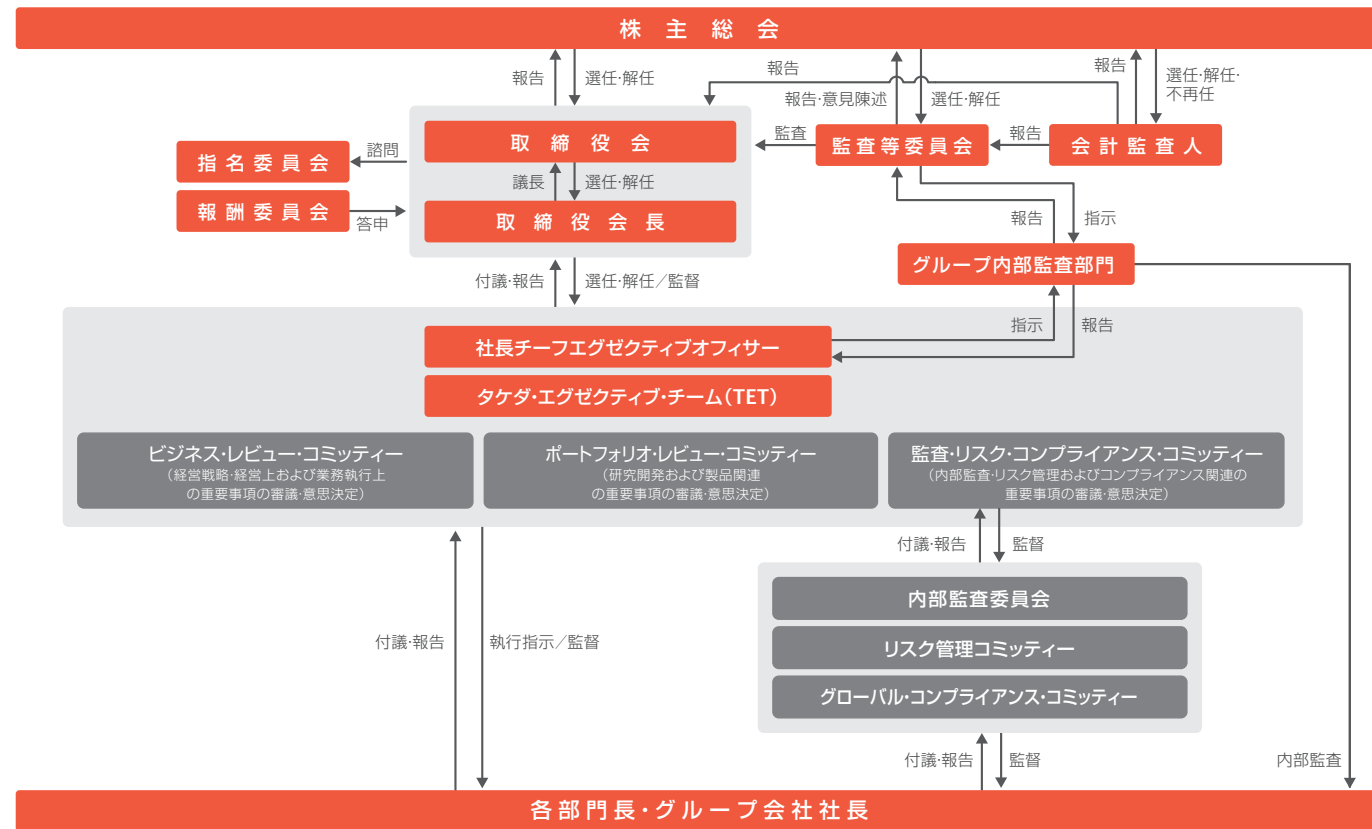


ジャン＝リュック・ブテル
社外取締役
監査等委員



初川 浩二
社外取締役
監査等委員

内部統制システムを含むコーポレート・ガバナンス体制についての模式図



内部統制システム

タケダは、規律のある健全な企業文化の醸成を図るとともに、内部統制をリスクマネジメントと一体となって機能するコーポレート・ガバナンスの重要な構成要素として捉え、内部統制システムの整備を図っています。

グローバルな事業展開において直面しうるあらゆるリスクについては、各部門の責任者が担当領域毎に管理するとともに、リスクの程度・内容に応じた回避措置、最小化措置を行う体制をとっています。

また、「タケダグループの経営管理方針」に基づき、各機能の役割・責任を明確化するとともに、定期的な内部監査やコンプライアンス・モ

ニタリング・プログラム等の実施により、グループ各社および各部門における法令順守ならびに適正な事業運営を担保しています。



持続的成長に向けて

2015年度は持続的成長への転換点となり、実質的な成長は2年連続で年間マネジメントガイダンスを達成*。

2016年度は、不断の戦略ロードマップ実行により成長を持続させる戦略フォーカスの年。

2015年度実績

2015年度は2年連続で年間マネジメントガイダンスを達成しました。実質的な売上収益は、主にタケダの成長ドライバーが力強く伸長したことにより対前年度3.4%の増収(財務ベース売上収益は対前年度1.7%増収の18,074億円)となりました。実質的なCore

2015年度実績

ガイダンス達成
実質的な成長率(対前年度)

- 売上収益 +3.4% ガイダンス達成(1桁台前半)
- Core Earnings +8.1% ガイダンス達成(売上収益よりも高い成長率)
- Core EPS +21.7% ガイダンス達成(Core Earningsよりも高い成長率)

タケダの「成長ドライバー」による持続的成長

- 連結売上収益の半分以上を占めるタケダの成長ドライバー(消化器系疾患(GI)、オンコロジー、中枢神経系疾患(CNS)および新興国事業)は前年度から+9.5%と力強く成長
- 「エンティビオ」は、2018年度中に20億ドルを超える売上(MAT:移動通年合計)に向け順調に進捗
- 2015年12月に米国で上市した「ニンラーロ」は良好な立ち上がり

目標を上回るコスト効率の実現

- プロジェクト・サミットは、2015年度の年間コスト削減目標を大きく上回る
- 力強い営業フリー・キャッシュ・フロー

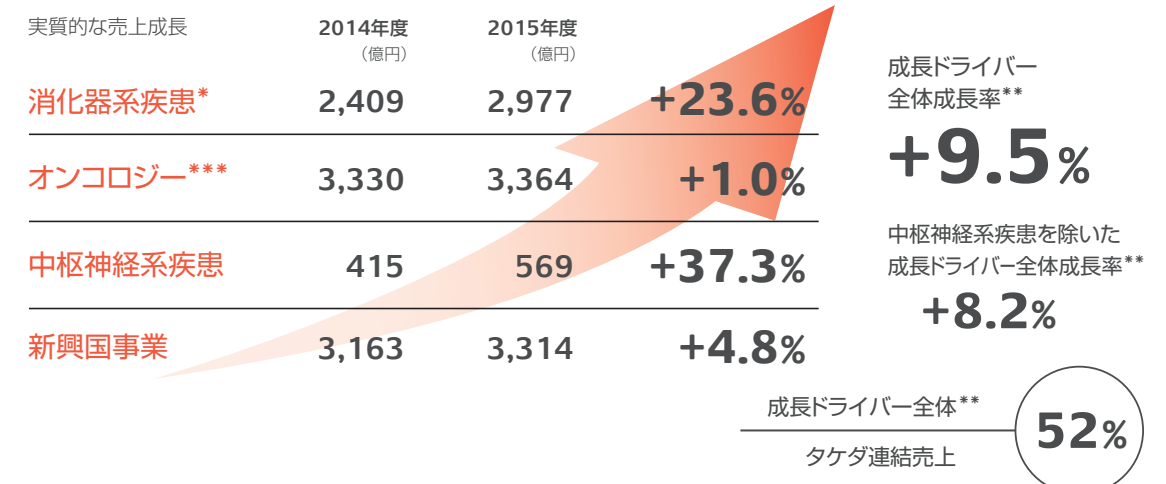
Earnings**は、売上収益の増加に加え、費用を的確に管理したことにより、対前年度8.1%の増益(財務ベース営業利益は1,308億円)となりました。特に、実質的な営業費用については、あらゆるオペレーションの有効性と効率性を追求する全社的取り組み「プロジェクト・サミット」の順調な進捗により、1%未満の増加に抑制しました。「プロジェクト・サミット」は300億円の削減額を達成し、年間のコスト削減目標200億円を大きく上回りました。実質的なCore EPSは21.7%(財務ベースEPSは102円)の成長となり、実質的なCore Earningsの2.5倍近い成長率を達成しました。

タケダの成長ドライバーは、消化器系疾患(GI)、オンコロジー、中枢神経系疾患(CNS)と新興国事業の全てにおいて力強く伸長したことにより、対前年度9.5%の実質的成長を実現しました。特に、潰瘍性大腸炎・クローン病治療剤「エンティビオ」は、売上が順調に拡大し、2014年6月の発売以来、累計売上10億ドルを達成しました。また、2015年12月、米国で販売を開始した多発性骨髄腫治療剤「ニンラーロ」は良好な立ち上がりとなっています。また、酸関連疾患治療剤「タケキャブ」、悪性リンパ腫治療剤「アドセトリス」、大うつ病治療剤「トリンテリックス***」など幅広い製品ポートフォリオの成長が、高血圧症治療剤「プロプレス」などのジェネリック医薬品浸透による減収影響の吸収に貢献しました。

* タケダは企業価値の持続的向上のため、定期的な事業活動の実績を把握することが重要と考えています。そのため、「実質的な成長」は、為替影響や製品売却、企業買収にかかる会計処理の影響や無形資産の償却費・減損損失、事業構造再編費用、主な訴訟費用などの特殊要因を除いて算定しており、売上収益、Core Earnings、Core EPSの実質的な成長を重要なマネジメント指標として示しています。
** Core Earningsは、営業利益から、企業買収にかかる会計処理の影響や無形資産の償却費・減損損失、事業構造再編費用、主な訴訟費用などの特殊要因を除いて算定しています。
*** 「トリンテリックス」は2016年6月より米国における製品名を「プリンテリックス」より変更して販売しています。

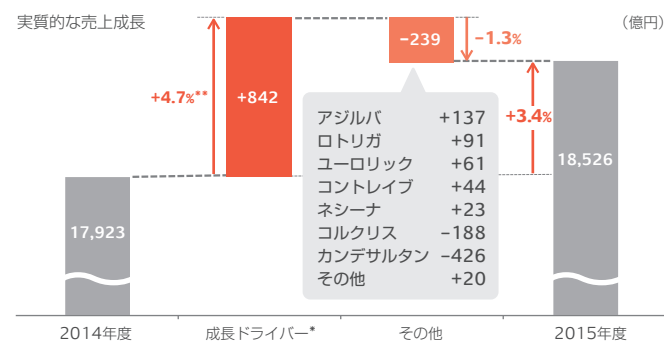


成長ドライバーは引き続き力強く成長



* 新興国でのバントプラソールの売上は、新興国での主力製品であるため新興国事業に含め、消化器系疾患(GI)には含めていません。その他の地域でのバントプラソールの売上はこのチャート中には含まれていません。
** 全体成長率は、消化器系疾患、オンコロジー、中枢神経系疾患、新興国事業の売上合計から重複を排除して算出しています。(例:新興国事業とオンコロジーにおけるアドセトリス等)
*** ベルケイドのロイヤリティを除いたオンコロジーの実質的な成長率は+4.4%

幅広い製品ポートフォリオの成長が特許満了影響を上回る



* 消化器系疾患、オンコロジー、中枢神経系疾患および新興国事業
 ** 2014年度の実質的な売上収益総額(17,923億円)に対する成長率(+4.7%)です。前ページの成長率+9.5%は2014年度の成長ドライバーの売上収益(8,845億円)に対する成長率です。

地域別の実質的な売上収益では、米国と新興国が成長を力強く牽引しています。米国は対前年度12.4%と2桁の成長を達成し、新興国は4.8%の成長率となりました。2015年度は一時的に低い成長率となりましたが、タケダは引き続き新興国市場に注力しており、将来的には1桁後半の成長率を見込んでいます。

アクトス訴訟和解基金への支払いを除いた営業フリー・キャッシュ・フローは、主に運転資本の改善により2,300億円(前年度は740億円)となり、配当金の支払いを大きく上回りました。

2015年度は、さらなる成長に向けて、下記の戦略的な契約を締結しました。

- アストラゼネカ社への呼吸器系疾患領域ポートフォリオの売却
- オレキシジェン社への肥満症治療剤「コントレイブ」の権利返還
- 日本におけるテバ社との合併会社への長期収載品の移管

テバ社との提携は、タケダにとって非常に画期的な取り組みです。2016年4月、売上が急激に減少している高血圧症治療剤「プロプレス」(単剤)、消化性潰瘍治療剤「タケブロン」(単剤)をはじめとする30成分を、テバ社との合併会社に移管しました。合併会社は、テバ社の高品質なジェネリック医薬品を含む幅広い製品ポートフォリオを患者さんに提供することで、事業の急速な拡大を目指しています。タケダは合併会社の株式の49%を保有することで、合併会社の最終利益の49%を計上し、配当金に加え、製品供給および流通にかかる役務収益も受領します。本提携は、2016年度以降も長期にわたり、財務ベースのEPSおよびキャッシュ・フローの向上に寄与すると見込んでいます。

2016年度の見通し

財務ベースの通期業績予想については、第2四半期決算発表(2016年10月28日)において、2016年5月10日の公表予想から当期利

益を上方修正しました。

売上収益は、各地域の売上が今後も堅調に伸長することを見込んでいるものの、円高による減収影響を考慮して、前回公表予想より2.9%引き下げた16,700億円を見込んでいます。営業利益については円高影響を吸収して、1,350億円の予想を維持します。当期利益およびEPS予想は、税金費用の減少影響を見込んで、前回公表予想より3.4%引き上げています。

実質的なCore Earningsの年間マネジメントガイダンスは、実質的な事業活動の力強い成長が見込まれることから「10%台前半から後半の成長」へ上方修正しており、実質的なCore EPSは「10%台前半から半ば」の範囲内で高い水準の成長を見込んでいます。

資金の使途に関する方針

- パイプラインや基盤技術に対する研究開発投資
- 成長ドライバーの強化に資する事業開発機会
- 企業価値向上による株主のキャピタルゲインを重視するとともに、配当と自己株式の取得による株主還元

株主還元

2016年度も、前年度と同額の1株当たり180円の配当を予定しております。

2016年度マネジメントガイダンス – 実質的な成長(%)

	2016年5月10日公表	2016年10月28日公表
実質的な売上収益	1桁台半ばの成長	1桁台半ばの成長
実質的なCore Earnings	10%台前半から半ばの成長	10%台半ばから後半の成長
実質的なCore EPS	10%台前半から半ばの成長	10%台前半から半ばの成長

2016年度財務ベース通期予想

	2016年5月10日公表予想	2016年10月28日公表予想	増減額	増減率
売上収益	17,200	16,700	-500	-2.9%
研究開発費	3,250	3,100	-150	-4.6%
営業利益	1,350	1,350	—	—
税引前当期利益	1,325	1,325	—	—
当期利益(親会社の所有者帰属分)	880	910	+30	+3.4%
EPS(円)	112	116	+4	+3.4%

(注)為替レート(年間平均)の想定 1米ドル=104円、1ユーロ=117円

タケダのバリューに基づくグローバルプレゼンスを構築

タケダは人々の健康と医療の未来に貢献する、機動的かつグローバルな製薬企業となることを目標に掲げています。世界中のパートナーとの関係強化および戦略的提携を通じ、より多くの国々にタケダ製品をお届けし、持続的な成長の実現を目指しています。

新興国 +4.8%*

35カ国を超える新興国市場において、消化器系疾患、オンコロジーおよび糖尿病におけるバリューブランドや革新的な新薬を提供していくとともに、その他国々への新規進出、アンメットニーズへの対応にむけた提携も検討しています。また、「タケダイズム」の実践ならびに徹底したコンプライアンスの浸透を図ることで、患者さん、医療関係者ならびに従業員からこの市場におけるベスト・イン・クラスの企業と評価され、トップ10製薬企業となることを目指します。

欧州・カナダ -0.3%*

EUCAN（ヨーロッパとカナダ）ビジネスユニットでは、機動的な組織ならびにスペシャリティケア事業への転換を加速させるとともに、潰瘍性大腸炎・クローン病治療剤「エンティビオ」をバイオロジクスにおける第1選択薬とする戦略やコスト管理の徹底、成熟製品の効率的な管理を通じた成長を引き続き目指します。また、多発性骨髄腫治療剤「ニンラーロ」の発売に向けて万全の体制を整えていきます。

2015年度 売上収益
1兆8,074億円
実質的な成長
+3.4%*

日本ヘルスケア（一般用医薬品）およびその他[§] +5.5%*

日本を中心としたアジア地域におけるコンシューマーヘルスケア市場においてリーディングカンパニーを目指し、ジャパン コンシューマーヘルスケア ビジネス ユニット事業の分社化に向けて、100%子会社「武田コンシューマーヘルスケア株式会社」を2016年4月に設立しました。新会社は、より機動的なビジネスモデルを構築し、当該市場における環境変化に迅速に対処していきます。新会社は、2017年4月から営業を開始する予定です。

日本（医療用医薬品） -3.3%*

ジャパン ファーマ ビジネスユニットでは、2016-2018年度において、高血圧症治療剤「アジルバ」ファミリー、2型糖尿病治療剤DPP-4ファミリー、高脂血症治療剤「ロトリガ」および酸関連疾患治療剤「タケキャブ」ファミリーの4つに集中し、引き続き日本の製薬業界を牽引していきます。長期的には、「エンティビオ」、大うつ病治療薬「トリンテリックス」**、パーキンソン病治療薬「ラサギリン」などスペシャリティ分野における製品の日本での上市が見込まれており、患者さんおよび医療関係者にさらなる価値を提供していきます。

また、幅広い患者さんのニーズならびにますます高まるジェネリック医薬品の重要性に対応するため、テバ社との合併会社を2016年4月に設立し、長期収載品を移管しました。

米国 +12.4%*

US ビジネスユニットでは、海外の最大市場である米国において、新製品である「エンティビオ」、「トリンテリックス」**に注力するとともに、他のコアブランドの成長も図ります。また、製品価値を正しく提供していくため、患者さん、保険者および医療機関のニーズに応えることのできる販売アプローチを採り、成長していきます。当ユニットでは、より集中的かつ機動的な運営を可能とするため、「エンティビオ」に関わる事業を管理するスペシャリティ ビジネスユニット、中枢神経系疾患、消化器系疾患、痛風、糖尿病関連の製品ポートフォリオを管理するジェネラル メディシン ユニートを新たに設置しました。

70以上
タケダが販売会社を有する国・地域の数

30,000人以上
世界のタケダ従業員数

グローバル オンコロジー

タケダは、革新的な医薬品を研究、開発し、世界中のがん患者さんにお届けすることで、がんの治癒を目指しています。革新的で急速に拡大しているパイプラインと販売製品を多数有しており、グローバルでの売上高は3,000億円に達しています。製品は、ホジキンリンパ腫・全身性未分化大細胞リンパ腫治療剤「アドセトリス」、直腸結腸がん治療剤「ベクティビックス」、前立腺がん治療剤「リユープリン」、骨肉腫治療剤「メバクト」、多発性骨髄腫・マンデル細胞リンパ腫治療剤「ベルケイド」ならびに「ニンラーロ」など多岐にわたります。タケダは、イムノジェン社、メルサナ・セラピューティクス社ならびにシアトルジェネティクス社などのパートナーシップにより抗体薬物複合体技術を強化していくとともに、世界中のトップクラスの研究機関や学術機関との戦略的パートナーシップを通じて、イノベーションの機会を外部から取り込むことで、さらに多くの世界中の患者さんに、画期的な新薬をお届けしていきます。

グローバル ワクチン

タケダは、世界の公衆衛生における最も重要な課題に対応するワクチンの開発、販売に取り組んでいます。現在、世界中で毎年10億人がデング熱、ノロウイルスに感染しているなか、これら感染症を予防する2つの有望なワクチンを開発後期段階に有しています。また、日本においてHibワクチンや水痘ワクチンなどの新製品を発売するとともに、製品ポートフォリオ拡充のため他社との提携も行うなど、ワクチンビジネスのさらなる拡充も図っています。製造拠点である光工場は、最先端のワクチン製造施設を有しており、今後、先進国・途上国に関わらず世界中の国々にタケダのワクチンを供給できるよう準備を進めています。

* 2015年度における、前年度比の実質的な成長率（為替影響および一時的要因を控除した実質ベースの成長率）

** 「トリンテリックス」は2016年6月より米国における製品名を「プリンテリックス」より変更して販売しています。 § 「その他」には、知的財産権収益を含みます。

Sustainable Development Goals

持続可能な開発目標

「持続可能な開発目標(SDGs)」に向けてのパートナーシップ

タケダのCorporate Social Responsibility(CSR)とは患者さんを第一に考えることです。

CSRの基本的な考え方

タケダは、優れた医薬品を創出する「医薬事業」を通じて患者さん(Patient)に貢献することがCSRの根幹であると考えています。その上で、「事業プロセス」全体の健全性の維持・向上に努め、また、「企業市民」として、社会の持続可能性を高める活動に関わることで、社会との深い信頼関係(Trust)を築いてタケダの評価(Reputation)を高め、さらなる「医薬事業」(Business)の成長へとつなげる、CSRによる価値創造・保全モデルを実践しています。具体的な活動の推進にあたっては、国連グローバル・コンパクトの10原則などの国際的な規範や、「持続可能な開発目標(SDGs)」などの国際的な長期目標を参照しています。

「持続可能な開発目標(SDGs)」の達成に向けて

2015年9月に国連総会で「持続可能な開発目標(SDGs)」が採択され、人間、地球および繁栄のための行動計画の概要が示されました。貧困撲滅と、地球の未来のために、すべてのステークホルダーは協働

し、この計画を実行することが期待されています。タケダは、CSR戦略を実践するにあたり、SDGsの中でも、「あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する」という「目標3」に向けた取り組みを重視し、人々の健康と医療の未来に貢献します。タケダは、過去10年間にわたり、NPO、NGO、CSR推進団体とのグローバルな連携や協働を進めてきました。その結果、SDGsの17目標に対応する多くのプログラムが現在進行しています。



SDGsに向けたアクション・マップ

タケダは、国連グローバル・コンパクトのLEADプログラム参加メンバーとして、「ヘルスケア/ライフサイエンス産業向けSDGsマトリクス」に基づき、「SDGsに向けたアクション・マップ」を作成しました。企業市民プログラムについては、国際コミュニティからの要請に対応するため、「途上国・新興国の人々の健康に貢献する予防活動」を中期的な戦略領域として設定しています。



人々の健康

- 医薬品ビジネス(治療薬およびワクチン)
- 途上国・新興国を中心とする、予防にフォーカスしたパートナーシップ・プログラム
 - 子どもたちへのワクチン接種・啓発
 - 母子保健
- 環境保全活動



貧困の撲滅

- 三大感染症(HIV/AIDS、結核、マラリア)に対する保健医療人材の育成支援プログラム(グローバルファンド)



飢餓の解消

- 少数民族の母子を対象にした保健支援(セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン)



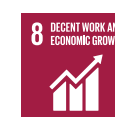
教育

- 医療従事者向けの糖尿病e-learningプログラム(プロジェクト・ホープ)



ジェンダー平等

- 地域ヘルスワーカーの能力強化を通じた母子保健プログラム(ワールドビジョン)



働きがい・働きやすさ

- 途上国・新興国の女性労働者の保健医療環境支援(BSR)



イノベーション

- ポリオ根絶を目指した事業提携(ビル&メリンダ・ゲイツ財団)
- 子どもたちへのグローバル「はしかワクチン」プログラム(国連財団)



不平等の解消

- デジタル出生登録プログラム(プラン・インターナショナル・ジャパン)



気候変動対応

- ケアリング・フォー・クライメイト(UNGC/UNEP)



制度構築

- グローバルヘルス技術振興基金(GHIT Fund)



その他の目標

- 強靱な社会を目指した自然災害への対応(IVOAD)
- グローバル・リレー・フォー・ライフ(アメリカ対がん協会)
- 生物多様性の保全に向けた取り組み(京都薬用植物園)

7 AFFORDABLE AND CLEAN ENERGY

11 SUSTAINABLE CITIES AND COMMUNITIES



パートナーシップ

- 国際連合
- 保健関係省庁
- 世界保健機関
- 業界団体

- グローバルファンド
- グローバルヘルス技術振興基金
- ビル&メリンダ・ゲイツ財団
- 国連財団

- 国連GC LEADプログラム
- BSR
- CSRヨーロッパ
- CSRアジア

- アメリカ対がん協会
- プラン・インターナショナル・ジャパン
- プロジェクト・ホープ
- セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
- ワールドビジョン

Promoting Responsibility in Business for a Secure Future

確かな未来に向けて
事業における責任を果たす



サプライヤー・ダイバーシティ

タケダのサプライヤー・ダイバーシティプログラムは、多様な企業から物品やサービスを購入することで社会に貢献する取り組みです。小規模企業や多様なサプライヤーとの提携は、新しい革新的な製品やサービスの利用を可能とする点でタケダのミッションの実現に寄与し、社会的責任と持続可能性に向けたバリューやコミットメントにも合致しています。また、製品やサービスの価格、品質、購買可能性の最適化により、購買プロセスにおける総合的な価値創造にもつながっています。

タケダは、小規模かつ多様な企業の経済的成長を促進し患者さんの治療のクオリティ向上を目指す団体、「ダイバーシティ・アライアンス・



ダイバーシティ・アライアンス・フォー・サイエンス 表彰式

* The Pharmaceutical Supply Chain Initiative

フォー・サイエンス」から、サプライヤーの成長への貢献が認められ、表彰を受けました。今回の受賞はサプライヤーからの推薦によるものであり、今後も社会への波及効果を生み出す活動を推進していきます。

持続可能な購買に向けた「タケダサプライヤー行動規準」の適用

タケダは、サプライヤーは事業にとって購買の戦略的な調達プロセスの一部であると考え、2015年度より新規および既存のサプライヤーと「タケダサプライヤー行動規準」を積極的に実施しています。2015年度には、120社以上のタケダのトップサプライヤーを含む約1,000社とサステナブル購買の取り組みを進めました。これらのサプライヤーは、タケダとともに、国連グローバル・コンパクトに関する活動や持続可能なビジネス慣行の促進に向けた活動に取り組んでいます。2016年度も「タケダサプライヤー行動規準」に基づき、持続可能性を重視した購買活動を推進していきます。「タケダサプライヤー行動規準」はPSCI*原則と合致するもので、環境、人権、労働慣行と安全な職場、データ機密性、腐敗防止、ビジネス慣行、動物保護、ならびにマネジメントシステムにおける指針を記載しています。

タケダサプライヤー行動規準：
<http://www.takeda.co.jp/company/position/>

Environmental Responsibility

環境への責任

自主行動計画:グローバル中期目標(2005年度比)



25% 削減

エネルギー起源の
CO₂排出量



20% 削減

NOx排出量



75% 削減

SOx排出量



60% 削減

廃棄物最終処分量



30% 削減

淡水使用量

環境への責任

タケダは、人々の健康と医療の未来に貢献するというミッションの実現に向けて、環境保全および従業員と地域社会の健康・安全への取り組みを重視しています。

タケダは、中長期的な視野を持って環境活動を推進するため、自主行動計画を策定し、CO₂排出量を2015年度に2005年度比で18%削減するなどの数値目標を設定しました。取り組みの結果、目標を大きく上回る21%の削減を達成しています。

2015年6月には、自主行動計画を新たに制定しました。2020年度を目標年とし、全社レベルで削減を促進し、グローバルな環境、防災、労働安全衛生に関して包括的に取り組んでいきます。

タケダは、国連グローバル・コンパクト、国連環境計画、国連気候変動枠組条約事務局が共催する、世界最大の企業主導型イニシアティブ「Caring for Climate(C4C)」に参加しています。この取り組みには65か国から450の企業が参加しており、タケダは日本の製薬企業として唯一の参加です。タケダは、気候変動への取り組み、進捗状況の

レポート、C4Cへの参加を通じ、低排出や気候回復力のある経済への推移という課題に関して、企業として果たすべき重要な役割を担っていきます。

タケダはまた、歴史的な合意「パリ協定」を支持し、700の企業、組織、個人の中の1社として、「パリ行動誓約」に署名しました。今後は、「パリ行動誓約」に署名した企業、都市、投資家などとともに、温度上昇を2℃以下に抑えるという目標値の実現に向けて取り組みを進めていきます。

連結純損益計算書

武田薬品工業株式会社および子会社 2016年および2015年3月期

	単位:百万円		単位:千米ドル
	2016年3月期	2015年3月期	2016年3月期
	IFRS	IFRS	IFRS
売上収益	¥1,807,378	¥1,777,824	\$16,137,304
売上原価	(535,405)	(520,990)	(4,780,402)
売上総利益	1,271,972	1,256,834	11,356,893
販売費及び一般管理費	(650,773)	(612,613)	(5,810,473)
研究開発費	(345,927)	(382,096)	(3,088,634)
製品に係る無形資産償却費及び減損損失	(125,140)	(176,402)	(1,117,321)
その他の営業収益	25,081	107,181	223,938
その他の営業費用	(44,386)	(322,158)	(396,304)
営業利益(損失)	130,828	(129,254)	1,168,107
金融収益	21,645	15,357	193,259
金融費用	(31,931)	(32,878)	(285,098)
持分法による投資利益(損失)	(3)	1,337	(27)
税引前当期利益(損失)	120,539	(145,437)	1,076,241
法人所得税費用	(37,059)	2,403	(330,884)
当期利益(損失)	¥ 83,480	¥ (143,034)	\$ 745,357

当期利益(損失)の帰属

親会社の所有者持分	¥ 80,166	¥ (145,775)	\$ 715,768
非支配持分	3,313	2,741	29,580
合計	¥ 83,480	¥ (143,034)	\$ 745,357

1株当たり当期利益

	単位:円		単位:米ドル
基本的1株当たり当期利益(損失)	¥ 102.26	¥ (185.37)	\$0.91
希薄化後1株当たり当期利益(損失)	101.71	(185.37)	0.91

(注)・当報告書の米ドル額は、便宜上、2016年3月末現在におけるおよその為替レートである1米ドル=112円で計算しています。
・2014年3月期より国際会計基準(IFRS)を適用し、IFRSに準拠して開示しています。

連結財務諸表および注記については、「有価証券報告書」の「第5【経理の状況】」に掲載しています。
<http://www.takeda.co.jp/investor-information/>

連結財政状態計算書

武田薬品工業株式会社および子会社 2016年および2015年3月期

	単位:百万円		単位:千米ドル
	2016年3月期	2015年3月期	2016年3月期
	IFRS	IFRS	IFRS
資産			
非流動資産			
有形固定資産	¥ 551,916	¥ 526,162	\$ 4,927,821
のれん	779,316	821,911	6,958,179
無形資産	743,128	939,381	6,635,071
投資不動産	26,626	30,218	237,732
持分法で会計処理されている投資	10,016	10,425	89,429
その他の金融資産	149,548	241,323	1,335,250
その他の非流動資産	18,975	52,192	169,420
繰延税金資産	170,773	154,506	1,524,759
非流動資産合計	2,450,298	2,776,120	21,877,661
流動資産			
棚卸資産	254,010	262,354	2,267,946
売上債権及びその他の債権	415,379	444,681	3,708,741
その他の金融資産	108,600	61,275	969,643
未収法人所得税等	15,192	22,148	135,643
その他の流動資産	64,145	63,225	572,723
現金及び現金同等物	451,426	652,148	4,030,589
(小計)	1,308,752	1,505,830	11,685,286
売却目的で保有する資産	65,035	14,243	580,670
流動資産合計	1,373,787	1,520,072	12,265,955
資産合計	¥3,824,085	¥4,296,192	\$34,143,616
負債及び資本			
負債			
非流動負債			
社債及び借入金	¥ 539,760	¥ 629,416	\$ 4,819,286
その他の金融負債	102,120	70,105	911,786
退職給付に係る負債	84,867	91,686	757,741
引当金	34,421	47,075	307,330
その他の非流動負債	71,032	78,778	634,214
繰延税金負債	123,469	156,132	1,102,402
非流動負債合計	955,668	1,073,191	8,532,750
流動負債			
社債及び借入金	228,464	99,965	2,039,857
仕入債務及びその他の債務	191,089	170,782	1,706,152
その他の金融負債	37,168	42,105	331,857
未払法人所得税	43,133	41,071	385,116
引当金	115,341	418,587	1,029,830
その他の流動負債	226,899	238,469	2,025,884
(小計)	842,094	1,010,978	7,518,696
売却目的で保有する資産に直接関連する負債	15,119	5,846	134,991
流動負債合計	857,213	1,016,824	7,653,688
負債合計	1,812,882	2,090,016	16,186,446
資本			
資本金	64,766	64,044	578,268
資本剰余金	68,829	59,575	614,545
自己株式	(35,974)	(18,203)	(321,196)
利益剰余金	1,523,127	1,601,326	13,599,348
その他の資本の構成要素	327,944	430,305	2,928,071
親会社の所有者に帰属する持分	1,948,692	2,137,047	17,399,036
非支配持分	62,511	69,129	558,134
資本合計	2,011,203	2,206,176	17,957,170
負債及び資本合計	¥3,824,085	¥4,296,192	\$34,143,616

連結財務諸表および注記については、「有価証券報告書」の「第5【経理の状況】」に掲載しています。
<http://www.takeda.co.jp/investor-information/>

11年間の要約財務データ

武田薬品工業株式会社および子会社

	単位:百万円											単位:千ドル
	2016年3月期	2015年3月期	2014年3月期	2013年3月期	2012年3月期	2011年3月期	2010年3月期	2009年3月期	2008年3月期	2007年3月期	2006年3月期	2016年3月期
	IFRS	IFRS	IFRS	IFRS	日本基準	日本基準	日本基準	日本基準	日本基準	日本基準	日本基準	IFRS
売上収益	¥1,807,378	¥1,777,824	¥1,691,685	¥1,557,005	¥1,508,932	¥1,419,385	¥1,465,965	¥1,538,336	¥1,374,802	¥1,305,167	¥1,212,207	\$16,137,304
研究開発費	345,927	382,096	341,560	321,323	281,885	288,874	296,392	453,046	275,788	193,301	169,645	3,088,634
営業利益(損失)	130,828	(129,254)	139,274	64,994	265,027	367,084	420,212	306,468	423,123	458,500	402,809	1,168,107
税引前当期利益(損失)	120,539	(145,437)	158,851	133,068	252,478	371,572	415,829	398,546	576,842	625,379	517,957	1,076,241
当期利益(損失)(親会社の所有者帰属分)	80,166	(145,775)	106,658	148,583	124,162	247,868	297,744	234,385	355,454	335,805	313,249	715,768
1株当たり金額(円および米ドル)												
基本的1株当たり当期利益(損失)	¥ 102.26	¥ (185.37)	¥ 135.10	¥ 188.21	¥ 157.29	¥ 314.01	¥ 377.19	¥ 289.82	¥ 418.97	¥ 386.00	¥ 353.47	\$ 0.91
希薄化後1株当たり当期利益(損失)	101.71	(185.37)	134.95	188.17	157.26	313.96	377.14	289.80	—	—	—	0.91
1株当たり配当金	180.00	180.00	180.00	180.00	180.00	180.00	180.00	180.00	168.00	128.00	106.00	1.6
非流動資産	¥2,450,298	¥2,776,120	¥2,976,607	¥2,821,151	¥2,298,034	¥1,200,150	¥1,250,400	¥1,284,604	¥ 605,487	¥ 714,788	¥ 670,324	\$21,877,661
流動資産	1,373,787	1,520,072	1,592,536	1,231,405	1,278,996	1,586,252	1,572,874	1,475,584	2,243,792	2,357,713	2,371,970	12,265,955
資産	3,824,085	4,296,192	4,569,144	4,052,556	3,577,030	2,786,402	2,823,274	2,760,188	2,849,279	3,072,501	3,042,294	34,143,616
非流動負債	955,668	1,073,191	1,225,755	1,080,423	753,433	213,150	230,051	234,242	98,035	168,978	158,444	8,532,750
流動負債	857,213	1,016,824	802,754	633,847	751,731	436,596	428,477	472,106	428,711	442,407	488,227	7,653,688
資本	2,011,203	2,206,176	2,540,635	2,338,286	2,071,866	2,136,656	2,164,746	2,053,840	2,322,533	2,461,116	2,395,623	17,957,170
株主数(人)	265,421	269,127	308,360	278,845	304,628	256,291	236,480	196,437	149,478	112,113	108,111	—
従業員数(人)	31,168	31,328	31,225	30,481	30,305	18,498	19,654	19,362	15,487	14,993	15,069	—

(注)・当報告書の米ドル額は、便宜上、2016年3月末現在におけるおよその為替レートである1米ドル=112円で計算しています。

・従業員数は、2011年3月期より工数換算ベースの就業人員数を表示しています。

・2014年3月期より国際会計基準(IFRS)を適用し、IFRSに準拠して開示しています。なお、2013年3月期の数値についてもIFRSに準拠して開示しています。

・IFRSでの科目名を表示しています。日本基準に基づく科目名は、各々以下の科目名に読み替えます。 ・売上高/売上収益 ・税金等調整前当期純利益/税引前当期利益 ・当期純利益/当期利益(親会社の所有者帰属分) ・1株当たり当期純利益/基本的1株当たり当期利益 ・潜在株式調整後1株当たり当期純利益/希薄化後1株当たり当期利益 ・固定資産/非流動資産 ・固定負債/非流動負債 ・純資産/資本

医療用医薬品売上収益の地域別内訳

武田薬品工業株式会社および子会社 2016年および2015年3月期

	単位:億円				
	2016年3月期 IFRS	2015年3月期 IFRS	財務ベース対前年	財務ベース増減率 2016/2015	実質的な成長率 2016/2015
製商品売上高	¥15,928	¥15,276	¥ 653	4.3%	4.8%
日本	5,351	5,532	(182)	(3.3)	(2.8)
米国	4,953	3,949	1,004	25.4	14.3
欧州およびカナダ	2,835	2,871	(36)	(1.2)	3.0
新興国	2,790	2,924	(134)	(4.6)	7.0
ロシア/CIS	615	795	(180)	(22.7)	4.6
ロシア	433	562	(129)	(29.7)	9.1
中南米	660	801	(140)	(17.5)	8.7
ブラジル	374	462	(88)	(23.5)	7.8
アジア	1,166	1,024	141	13.8	8.4
中国	632	530	103	16.2	11.1
その他	349	303	45	14.9	2.4
知的財産権収益・役務収益	558	869	(311)	(35.8)	(29.4)
日本	66	81	(15)	(18.7)	(28.8)
海外	493	788	(296)	(37.5)	(29.4)
医療用医薬品売上収益 合計	¥16,487	¥16,145	¥ 342	(2.1)	3.2
海外医療用医薬品売上収益比率	67.1%	65.2%	1.9pt		

(注)・売上収益は、顧客の所在地を基礎とし、国または地域に分類しています。

- ・2014年度より、組織体制との相互関連性を考慮し、従来の「北米」を「米国」と「カナダ」に分割したうえで、「カナダ」と従来の「欧州」を統合し「欧州およびカナダ」としています。
- ・本変更により、2013年度の数値を変更後の区分により作成しています。
- ・「その他」には、中東・大洋州・アフリカが含まれています。

医療用医薬品グローバル主要品目売上高

武田薬品工業株式会社および子会社 2016年および2015年3月期

品目	単位:億円				
	2016年3月期 IFRS	2015年3月期 IFRS	財務ベース対前年	財務ベース増減率 2016/2015	実質的な成長率 2016/2015
ベルケイド	¥1,620	¥1,527	¥ 93	6.1%	(4.2)%
リュープロレリン	1,244	1,240	4	0.3	0.5
パントプラゾール	1,008	1,037	(30)	(2.9)	(2.0)
ランソプラゾール	895	1,029	(134)	(13.1)	(15.2)
エンティビオ	862	278	583	—	199.1
カンデサルタン	848	1,257	(410)	(32.6)	(33.4)
デクスラント	751	623	128	20.6	11.9
アジルバ	590	454	137	30.1	30.1
ネシーナ	489	443	46	10.5	10.4
コルクリス	465	588	(124)	(21.0)	(28.9)
ユーロリック	425	332	93	28.1	16.7
アミティーザ	373	320	53	16.7	5.7
アドセトリス	276	229	48	20.8	27.6
トリンテリックス [※]	245	136	109	79.9	63.7
タケキャブ	84	32	52	161.0	161.0
ニンラーロ	40	—	40	—	—

(注)品目売上高には、知的財産権収益および役務収益を含めて表示しています。

※ 2016年6月より、米国における製品名を「プリンテリックス」から「トリンテリックス」に変更して販売しています。

社会的責任に関する主なデータ

武田薬品工業株式会社および子会社

労働

		2016年3月期	2015年3月	2014年3月期
従業員数	合計	31,168 人	31,328 人	31,225 人
	日本	9,291 人	9,612 人	9,554 人
	海外	21,877 人	21,716 人	21,671 人
	医療用医薬品事業	28,762 人	28,761 人	28,672 人
	ヘルスケア事業	500 人	457 人	461 人
	その他事業	1,906 人	2,110 人	2,092 人

(注)工数換算ベースの就業人員数を表示しています。

環境

	2016年3月期	2015年3月	2014年3月期
総エネルギー投入量	8,245 百万MJ	8,387 百万MJ	8,725 百万MJ
淡水使用量	5,591 千m ³	6,186 千m ³	6,673 千m ³
CO ₂ 排出量	407 千トン-CO ₂	415 千トン-CO ₂	418 千トン-CO ₂
NOx(窒素酸化物)排出量	88 トン	94 トン	300 トン
SOx(硫黄酸化物)排出量	18 トン	14 トン	106 トン
ばいじん排出量	2 トン	2 トン	26 トン
廃棄物発生量	38 千トン	44 千トン	42 千トン
PRTR対象物質 大気排出量(日本)	32 トン	40 トン	34 トン

企業市民活動

	2016年3月期	2015年3月	2014年3月期
寄付金	2,442 百万円	1,489 百万円	3,220 百万円
武田科学振興財団 研究助成金	1,663 百万円	1,516 百万円	1,520 百万円
尚志社 奨学金	85 百万円	105 百万円	102 百万円
発酵研究所 研究助成金	404 百万円	396 百万円	407 百万円

会社情報

2016年3月末現在

武田薬品工業株式会社

創業 1781年6月12日
 設立 1925年1月29日
 資本金 647億66百万円
 株主数 265,421名
 発行済み株式数 790,284,095株
 独立監査人 有限責任 あずさ監査法人
 〒541-0048 大阪市中央区瓦町3-6-5 銀泉備後町ビル
 上場証券取引所 東京、名古屋、福岡、札幌 (証券コード4502)
 株主名簿管理人 三菱UFJ信託銀行株式会社
 〒100-8212 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号

American Depositary Receipts(ADR):

比率:2ADR=1普通株
 取引:OTC(店頭取引)
 シンボル:TKPYY
 CUSIP番号:874060205

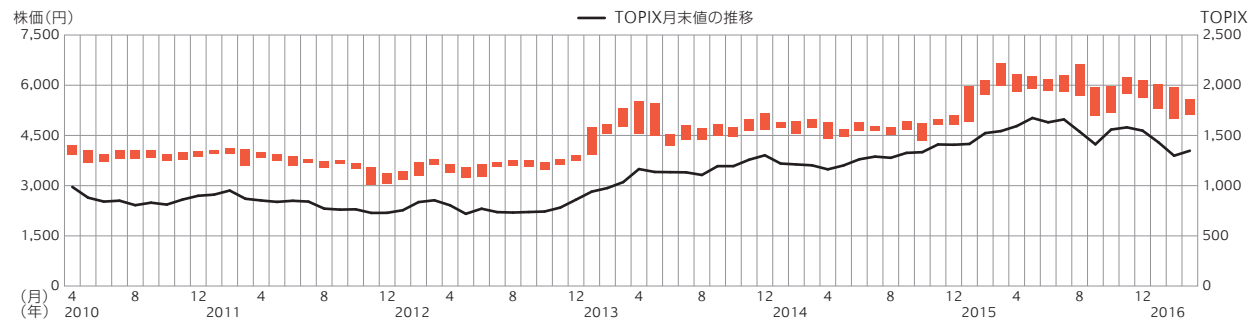
ADR名簿管理人:

The Bank of New York Mellon
 101 Barclay Street, New York, NY 10286
 お問い合わせ先:
 電話:(201)680-6825
 フリーダイヤル(米国内):(888)269-2377
 URL: <http://www.adrbnymellon.com>

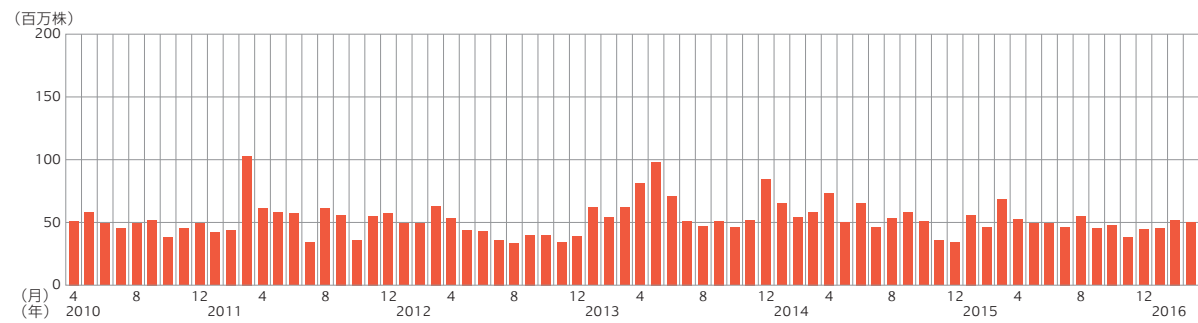
主要株主(上位10名)

株主名	持株数(千株)	持株比率(%)
日本生命保険(相)	50,760	6.42
日本マスタートラスト信託銀行(株)(信託口)	36,308	4.59
日本トラスティ・サービス信託銀行(株)(信託口)	33,223	4.20
JP MORGAN CHASE BANK 380055	30,670	3.88
公益財団法人武田科学振興財団	17,912	2.27
パークレイズ証券会社	15,000	1.90
STATE STREET BANK WEST CLIENT-TREATY 505234	13,741	1.74
JP MORGAN CHASE BANK 385147	11,358	1.44
日本トラスティ・サービス信託銀行(株)(信託口7)	10,903	1.38
STATE STREET BANK AND TRUST COMPANY 505225	10,044	1.27

株価の推移(東京証券取引所)



出来高の推移



※ TOPIX(東証株価指数)は株式会社東京証券取引所の知的財産であり、当該指数の算出、数値の公表、利用およびTOPIXの商標に関するすべての権利は東証が所有しています。

お問い合わせ先

本社

〒540-8645 大阪市中央区道修町四丁目1番1号
 Tel: 06-6204-2111
 Fax: 06-6204-2880

東京本社

〒103-8668 東京都中央区日本橋二丁目12番10号
 Tel: 03-3278-2111
 Fax: 03-3278-2000

ホームページアドレス

<http://www.takeda.co.jp/>



www.takeda.co.jp

2016年10月発行

武田薬品工業株式会社